

聖徒の道

9

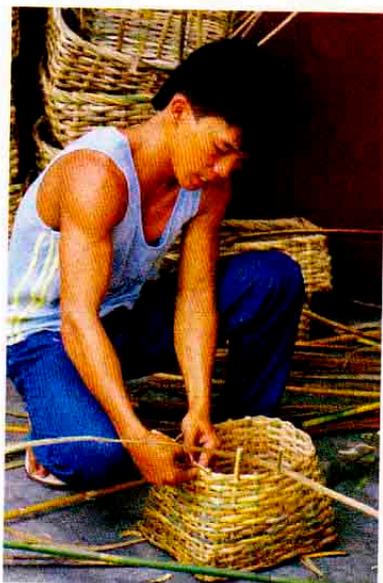
1991



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1991年9月号



表紙——ミンダナオ島に住むこの青年は、教会員ばかりの協同組合に加わって、藤かごを製作している。1日の仕事は祈りを捧げ、聖典を読むことから始まった。作業の間は、賛美歌のテープが流れている。(本文「フィリピンの聖徒たち 信仰の民」p. 8参照)マービン・K・ガードナー撮影。

こどものページ表紙——4才のジャン・ミッシェル・カブリットは、バギオに住んでいます。家でいの夕べでは、イエス様について学んで歌とおいのりでおわります。その後、お父さんとお母さんがだいてくれます。そして、おいしいリフレッシュメント！ マービン・K・ガードナー撮影。

一般

- 大管長会メッセージ——家族の祈りがもたらす祝福
第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー 2
- フィリピンの聖徒たち——信仰の民 マービン・K・ガードナー 8
- ラドミラ・ラノビッチ——自分自身で知ることができる
ケネス・S・ロジャーソン 22
- やさしい教え マーサ・マクファーレン・ワイザー 26
- 伴侶との関係を改善するには ハワード・C・マクファーレン 29
- 重要でないと思われた聖句から キム・R・バーニンガム 30
- イエスが歩まれた地 第1部 34

- ルイス・アルベルト・フェリーソ——地区代表
ネストール・クルベロ 46

青少年

- 自分の善良さを計ってみましょう 33
- 「知恵の道」 ジル・ヘミング 44

定期特別記事

- 読者からの便り 1
- 家庭訪問メッセージ——豊かな愛 25

こども

- はたらき者のプリガム ケリー・リックス 2
- 分かち合いの時間——神様のちゅう実なしもべ
ローレル・ロールフィンク 5
- ベンジャミン王のとう ボニー・ダールズルッド 8
- 小さなお友だちへ——ロバート・E・サックリー長老 12
- せかいのおともだち 14
- おもちゃばこ 16

聖徒の道

1991年9月号

読者からの便り

ペンパルについて

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット
顧問：レックス・D・ピネガー、ジーン・R・クック、ジョン・H・グローバーク、ロバート・E・ウエルズ
編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウオーカー
工程管理：ダイアナ・バンスタブレ
チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、スティーフ・デイトン、ジェーン・アン・ケンブ、デニス・カービー
配送部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道 1991年9月号第35巻第9号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約 1,100円(送料共)
普通号 150円、大会号 350円

International Magazine
ITEM 91989 300
Printed in Tokyo, Japan.
Copyright © 1991 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-3440-2351(代表)●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year, \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

「リアホナ」(スペイン語版)に感謝しています。「リアホナ」は、世界中の聖徒と同様、グアテマラの聖徒たちにとっても生活の指針となっています。

私は、若い末日聖徒のひとりとして、世界各国の同じ信仰を持つ人たちと友達になりたいと思っています。そして手紙を通じてお互いの証を強め合いたいのです。そこで私は、「リアホナ」やほかの教会機関誌に世界各国の若い人たちが、住所、氏名、年齢、電話番号、趣味などの自己紹介の記事を投稿できたらいいと考えています。

こうすれば、もっと友達を作りたいと望んでいる教会の多くの若い世代同士が手紙や電話で連絡し合えるのではないのでしょうか。

グアテマラ
エスクイントラスターキ部
モデロワード部
アナ・ロドリゲス

編集室から—ペンパルを持ちたいという多数のご要望をお寄せいただいています。しかしながら、教会機関誌に対する教会の規定によると、「文通希望者のリストは発行しない」とされています。このような教会の方針は、会員の住所や氏名を記載した場合に予想される悪影響から、読者の方々を守るために設定されたものです。

すばらしい宝

私たち夫婦は家庭の夕べを開こうと決心しました。それによって私たちは、お互いをもっとよく理解し合い、イエス・キリストの真の福音と教会幹部の教えをよく学びたいと思ったのです。そして「リアホナ」(スペイン語版)の中にそのような目的に応じてくれるすばらしい「知識の宝」を見いだしました。私たちは「リアホナ」を通して、毎月霊の糧をいただいています。

すべての兄弟姉妹の皆さんに、この重要な本を予約購読してほしいと思っています。「リアホナ」はモルモン経、聖書、教義と聖約、そしてそのほかの教会の本を補って完全にするものだと心から証します。また、教会幹部の方々の方々のすばらしいメッセージや、信仰が強められる記事や話を投稿してくれる兄弟姉妹に心から感謝しています。グアテマラ

エル・モリナスターキ部第11ワード部
カルロス・A・ロチャ、アナ・セシリア・デ・ロチャ

福音に添った本

1990年11月号に大変感謝しています。すばらしい内容でした。これほど福音に添った本を手にしたことはありません。まるで私のために書かれたメッセージのように感じたほどです。

特に『教会で話をするための提案』は私のファイルに加えて大切に保管しています。

ブラジル、サンパウロ
サン・ジョゼ・ドス・カンポススターキ部サテリテワード部
アナ・クラウディア・デ・シルビア (18歳)

編集室から

世界中の愛読者の皆様に心よりお礼申し上げます。皆様からの手紙、記事、証、体験談などを募集しています。お便りは日本語でも結構です。(投稿の際は、住所、氏名、所属スターキ部/地方部名、ワード部/支部名を記入してください)これまでいただいたお便りに感謝するとともに、今後もさらに多くのお便りをお待ちしています。あて先は下記のとおりです。

International Magazines
50 East North Temple Street
Salt Lake City, Utah 84150
U. S. A.



家族の祈りがもたらす 祝福

第一副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

使徒パウロは、テモテに次のように語っています。「しかし、このことは知っておかねばならない。終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者、そしる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快楽を愛する者、……〔となるであろう。〕」（Ⅱテモテ3：1-4）

**家族の祈りは
基本的なことですが、
社会の道德律をむしばむ
恐ろしい病気を食い止める
治療薬のひとつなのです。**

現代では、誠実さ、道德心、高潔さを以前にも増して強調する必要があります。私たちが真の成長に不可欠な美德を生活の中に築いていくときにのみ、現代社会の風潮を変えていくことができるのです。そこで皆さんは「では一体、何から始めればよいのだろうか」という疑問に直面するのではないのでしょうか。

私が確信しているのは、まず、神を永遠の御父として、また自分自身を神の子として認識することから始める必要があるということです。すなわち天父を至高者と認め、意思疎通を図り、自らの問題に対して日々天父の導きを祈り求めることから始めるのです。



祈りの習慣を持つ家族こそ、
より良い社会を築く担い手なのです。
たった1日でその奇跡を
起こすことはできないでしょうが、
皆さんの子供が大人になるころには
奇跡を生み出せるでしょう。

家族の祈りを必ず行なうようにもう一度勧めたいと思います。家族の祈りは基本的なことですが、社会の道徳律をむしろ恐ろしい病気を食い止める治療薬のひとつなのです。たった1日でその奇跡を起こすことはできないでしょうが、皆さんの子供が大人になるころには奇跡を生み出せるでしょう。

1, 2世代前までは、世界中のクリスチャンの家庭において、家族の祈りは食事と同様に日々の生活の中で重要な位置を占めていました。そのような習慣が失なわれていくにつれ、使徒パウロが語った道徳の衰退が始まりました。

父親と母親、そして子供たちが共にひざまずいて朝夕に捧げる祈りに勝るものはありません。厚いじゅうたんやきれいなカーテン、美しく彩られた壁や家具にも増して麗しく、優れた家庭を築くために必要なものは、家族の祈りなのです。

ひざまずくという姿勢そのものの中に、パウロが「高慢な者、……乱暴者、高言をする者」と表現した人々の態度とは正反対の大切なものが潜んでいるのです。

父親と母親、そして子供たちがひざまずいて共に祈るというその習慣自体の中に、パウロが言う「親に逆らう者、……無情な者」の芽を摘み取る大切なものが含まれているのです。

神に話し掛けるという行為の中に、神を冒瀆したり、「神よりも快楽を愛する者」となったりする傾向を抑える大切なものがあるのです。

「恩を知らぬ者、神聖を汚す者」になる傾向をなくすには、家族が集まって、日々の暮らしと平安に対して、そして与えられているすべてに対して、主に感謝の祈り

を捧げることです。家族が互いのことを主に感謝するとき、家族一人一人に対する理解や尊敬、愛情を新たにし、それをさらに深めることができます。

聖典の中で主は次のように言われています。「すべての事に就きて、主なる汝の神に感謝すべし。」(教義と聖約59:7)そして後の聖句で再びこう言われました。「およそ人何事にも神を怒らせずまたは何事にも神の怒り燃ゆることなし、たゞすべての事の中に神の御手のあることを告白せず、その誠命に従わざる者に神の怒りあり。」(教義と聖約59:21)

家族が主のみ前にひざまずき、貧しい人々や苦しんでいる人々を心に留めるとき、人に対する無私的愛や尊敬の気持ち、人の必要を満たすために働きたいという望みをはぐくんでいるのです。苦しむ隣人に助けが与えられるように神に願うとき、人は必ずその隣人を援助するためにみずから行動するよう強い気持ちに駆られます。利己心を乗り越え、自分を忘れて人々に奉仕するなら、世の人々の生活にどれほど大きな奇跡が生じるでしょう。日々の家族の祈りの中からそれらの奇跡が生まれてくるのです。

子供たちの愛国心をはぐくむ最良の方法は、両親が子供たちの前で自分たちの暮らしている国のために祈ることです。自由と平和が保たれるよう、全能の主の祝福を祈り求めるのです。

子供たちの心に、権威ある者への大切な尊敬の念を築く最良の方法は、日々、政府の指導者について家族の祈りの中で思い起こすことです。

以前次のように書かれた屋外広告の看板をいくつかの町で見掛けました。「祈る国家に平和あり。」そのとおり

共に祈ることを通して、
……自らの弱さを告白し、
家庭とそこに住まう家族
一人一人の上に主の祝福を
請い求めるようになります。



だと思えます。

共に祈るなら、家庭内の張り詰めた雰囲気が和らげられます。共に祈るなら、子供たちは親に対する尊敬の念から従順になるでしょう。共に祈るなら、過ちを悔いる精神が生じ、多くの場合、それが家庭の崩壊という暗い影を遠ざけてくれるでしょう。共に祈ることを通して、主のみ前に自らの弱さを告白し、家庭とそこに住まう家族一人一人の上に主の祝福を請い求めるようになります。

亡くなって久しいある人の言葉が、長い間私の心に残っています。それは、十二使徒だった故ヘンリー・D・モイル長老の父親、ジェームズ・H・モイル兄弟が自分の家の家族の祈りについて孫たちに書き送った言葉です。「おじいちゃんたちはひざまずいて神様から導きと承認を願い求めずに眠りに就いたことはなかった。どんなに堅固な家庭でも意見の食い違いはあるものさ。しかし、そんなものは祈りの心があれば吹き飛んでしまうよ。……祈りには、人々の心に働き掛けてもっと正しく生きるように促す作用があって、それが一致や愛、赦し、奉仕につながるものだからさ。」

初期の聖徒たちがアイオワ州で苦難の日々を送っていたときや、合衆国の軍隊がソルトレーク盆地に到来したときも、私たちの力強い味方になってくれたトーマス・L・ケイン大佐が、1872年に妻とふたりの息子を伴って再び西部にやって来ました。ケイン大佐たちはブリガム・ヤングと共に、夜になると教会員の家に立ち寄りながらセントジョージまでの旅を続けました。ケイン夫人はペンシルベニア州フィラデルフィアに住む父親に向けて何通もの手紙を書き送りました。ある手紙の中で夫人は次のように書いています。

「この旅の途中泊めてもらった家では、皆が夕食を終えたとすぐに祈り、そして朝食の前に再び祈るのです。家族みんなが喜んで祈りに加わります。……モルモンの人々は……家長や主賓が声に出して祈っている間、共にひざまずいています。神を賛美する飾り立てた言葉にはほとんど時間をかけません。その代わりに、自分たちに必要なものを請い求め、主が与えてくださったものに感謝を捧げています。……神が自分たちの愛称や敬称を知っておられるかのように祈り、[名前をあげて特定の個人]の上に祝福があるように願っています。……慣れてしまうと私もこのような祈り方が好きになりました。」

開拓者の聖徒たちにとってこのように重要であった家族の祈りを、私たちがひとつの民としてしっかり習慣づけられるように心から願っています。家族の祈りは、礼拝堂で行なわれる集会同様に、彼らの礼拝にとって重要な位置を占めていました。この日々の祈りがもたらす信仰によって、荒地を開墾し、乾いた土地に水を引き、砂漠に花を咲かせ、愛をもって家族を治め、互いに穏やかに暮らし、自らを忘れて神に仕え、自分の名前を不朽のものとなりました。

社会は、家族という基本単位により成り立っています。したがって、祈りの習慣を持つ家族こそ、より良い社会を築く担い手なのです。「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。」(イザヤ55:6)

日本で伝道している若い宣教師の悲嘆に暮れた次のような言葉に心を動かされたことがあります。「ここに来てもう何カ月にもなりますが、一向に言葉がわかりませんし、人々も好きになれません。昼は苦しみ、夜は泣いています。もう死んでしまいたいです。母に手紙を書い

家族が主のみ前にひざまずき、
貧しい人々や
苦しんでいる人々を心に留めるとき、
人に対する無私の愛や尊敬の気持ち、
人の必要を満たすために
働きたいという望みを
はぐくんでいるのです。

て、家に帰りたと言いました。するとこんな返事が来ました。『みんなであなたのために祈っています。朝は食事の前に、夜は床に就く前に、1日も欠かさずに皆でひざまずいて、あなたの上に主が祝福を授けてくださるよう心を込めて祈っています。祈りに加えて断食もしています。妹や弟たちはこう祈っています。——天のお父様、日本にいるジョニーを祝福してください。兄さんが言葉をよく学べて、召しをよく果たせるように助けてあげてください。』

この青年はその後、涙を流しながらこう続けました。「私はもう一度やってみます。家族と共に私も祈り、家族と共に私も断食します。」

もう一度やってみます、というその言葉を聞いてから4カ月後、この青年から手紙を受け取りました。こう書いてありました。「奇跡が起こりました。主が日本語の賜を授けてくださり、私はこの美しい国の人々を愛するようになりました。家族の祈りに心から感謝しています。」

家庭を一層美しい場所にできるでしょうか。できます。あらゆる真の美の源であるお方に向かって、家族で祈るときにそれができるのです。社会を強め、もっと住みよい場所にできるでしょうか。できます。家族で共にひざまずき、全能者にその愛子のみ名によって祈りを捧げ、堅固な家庭生活を築くことによってそれは可能になります。

家族の祈りを世界中に押し広げていけば、私たちを破滅に至らせる深刻な問題をわずか1世代で大幅に取り除けるでしょう。家族の祈りが人々の心に正直、互いへの敬意、感謝の精神を回復してくれるからです。

主はこう言われました。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」(マタイ7:7)

もし家族の祈りを心から行なっていくなら、必ず祝福があることを証いたします。変化はすぐには表われないかもしれませんが。その変化はきわめて微妙なものです。しかし、確実に起こります。神は「ご自身を求める者に報いて下さる」(ヘブル11:6)からです。

末日聖徒が家族で祈りを捧げ、周囲の人々にも同様の習慣を持つように勧めて、世の人々の前に忠誠の模範を示せるよう願っています。□

ホームティーチャーへの提案

ホームティーチングで話し合う際、以下の点を強調するとよい。

1. 使徒パウロは私たちの時代をよく描写している。「終りの時には、苦難の時代が来る。」(IIテモテ3:1)
2. 私たちが真の美德を生活の中に築いていくときのみ、現代社会の風潮を変えていくことができる。
3. 家族の祈りは、社会の道徳律をむしばむ恐ろしい病気を食い止めるための、基本的な治療薬のひとつである。
4. 共にひざまずき、神に話し掛け、苦しんでいる人々を心に留め、家庭の張り詰めた雰囲気や和らげるよう祈るなら、子供たちに真理を教え、愛と尊敬をはぐくむ助けとなる。



フィリピンの 聖徒たち

信仰の民

マービン・K・ガードナー

天井では扇風機が回っていますが、湿った空気はほとんど動きません。礼拝堂の側面の戸はすべて開け放たれていますが、涼しい風も入ってきません。

駐車場はがらあきです。それでも、ここマニラにあるバテロスワード部の小さな礼拝堂は満員です。歩いて来る会員もいれば、「ジープニー」と呼ばれるフィリピン特有のジープを改造した小型バスや、「ベディキャブ」と呼ばれる自転車を利用したサイドカー付きのタクシーで来る人もいます。

監督はこう語ります。物質的な意味では、「この国の教会員のほとんどは、貧しい生活を送っています。ところが面接をすると、皆口をそろえて自分たちは祝福され、祈りの答えを受けていると言います。」

聖餐会が始まります。ある姉妹はキリストの純粋な愛について話し、次に若い男性がジェレド人国家の崩壊につ

いて話をします。「この物語は、愛がなければ私たちは無に等しいという教訓を示しています。私たちにも同じことが言えます。」若者はそう述べています。

指揮者の少女が立ち上がります。伴奏者がいないので、彼女がリードをとり、会衆がそれに合わせて『主の恵み、人にも分かたん』（賛美歌138番）を歌い出します。

自然災害と政情不安に苦しむこの国で、祝福を受け、共に分かち合うことが、なぜそれほど強調されるのでしょうか。会員たちはどのような祝福を受け、どのように奉仕をしているのでしょうか。

主から受けた祝福について語るフィリピンの聖徒たちの話に耳を傾ければ、答えはおのずと明らかになります。彼らは主イエス・キリストを信じるあつい信仰に恵まれ、生活の中にみたまの賜を豊かに受けているのです。彼らは

主の恵みに対する証を率直に語ってくれます。

「天父は、
まさに私が必要なものをご存じます。」

マルー・ドクタ姉妹は暗やみの中で震えながら祈っていました。たけり狂う台風が、彼女たちが身を寄せ合う小さな家をなぎ倒そうとしています。日ごろ穏やかな海はまったくその表情を変え、凶暴に荒れ狂っています。皆泣いていました。

ニッパやし、しゅろ、木材でできたその小さな家は、ソルソゴン市近郊の

カブカベン支部の指揮者はハンス・バロンナ姉妹(18歳)。バタン半島にあるこの集会所からマニラ湾やコレヒドール島が見渡せる。





ペデロ・ドクタとエミリー・ドクタの家族(上)は台風で家を失った後にこの新しい家建てた。子供たちの中でマルー(左から3番目)が最年長。日曜日の集会后、「自家用車」に乗るバテロスワード部の家族(左)。



海岸沿いに建っています。何時間か後、マルーの家族は家から避難しました。彼らは泥とがれきの中を、胸まで水に漬かり、凍えながら丘の上にある友人の家を目指して進んで行きました。

嵐の中、マルーは祈り続けました。突然、大学ノートのことを思い出しました。どうして忘れてきたのでしょうか。教会から得た奨学金をノートの中にはさんだままです。その学費があればこそ卒業試験が受けられるのです。卒業にはどうしても必要なお金でした。それがなければ、良い仕事に就いて家族を支えるという彼女の卒業後の夢は、嵐の中のニッパぶきの小屋のように、跡形もなく消えてしまうのです。

「私は友人に話し掛けるように、主に祈りました。『あのお金は主のもです。あのお金がなければ卒業できません。主がご存じのとおりです。』私はお金がなくならないように天父に祈り続けました。」

午前2時、男たちは思い切って外へ出ました。「海岸沿いの家はどれもみな無くなっていました」とマルーは語ります。皆、涙を流しながら自分の目で確かめに行きました。「家はすべて完全に崩れ去っていたのです。」

海岸には嵐で亡くなった人々や動物の死体が、がれきと共に散乱していました。「家族が全員無事だったことをただただ感謝しました。失わずに済んだものは、命と着ている服だけでした。学資は失ってもそれはただのお金ですから、そう考えると落ち着きました。」

人々は失ったものをわずかでも回収しようと砂や泥を掘り返し始めました。「しばらくして、いとこの叫び声が聞こえてきました。『これはマルーのノートじゃない?』駆け寄って手にしてみると、ぬれてはいましたが、お金が

そのまま入っていたのです。」

マルーは当時を振り返り、再びほほを涙でぬらしました。「天父は、まさに私が必要なものをご存じなのです。」

それ以外にマルーの家族が見付けたものといえば、掛け替えのない数枚の写真だけでした。両親が若いころの写真、家族のバプテスマの日に白い衣装で撮った写真、マニラ神殿で家族が結び固められた日に白い神殿着で撮った写真でした。

1987年の台風の後、マルーは会計学科を卒業し、伝道に出ました。義援金と援助物資を得て、家族は海沿いの同じ場所に新しい家を建てました。ほかの土地を買うには資金が足りなかったのです。壁には水の染みのついた写真と、マルーの卒業証書が飾ってあります。「本当に奇跡でした。貴重な教訓になっています」と彼女は語ります。

「子供を救えたはずです」

パサイ市に住むコンソラシオン・ペロベリロ姉妹は語ります。「新婚当初は料理の仕方さえ知りませんでした。産前の診察に対しても迷信的な恐れを抱いていました。そして最初の赤ちゃんは死んでしまったのです。」

彼女は涙を流しながらこう語ります。「当時、私が教会員になっていれば子供は救えたはずです。」

バプテスマの後、彼女は扶助協会で水の浄化、衛生、栄養、応急手当、そして免疫について習いました。

「私は子供の養育方法や家族の食生活について学びました」と彼女は語ります。その後生まれた7人の子供は健康です。彼女は今、ワード部のホームメイキングの担当役員として、これまで自分が学んできたことを教えてい

ます。また、家族で営む食事配達サービス業でも、料理の腕を振るっています。

「これでもレストランなのか!」

ホベンシオ・イラーガン兄弟は、「宣教師が訪問したときは、最初ちょっと興味がある振りをしていただけでした」と笑みを浮かべます。「宗教にはあまり関心がなかったのです。」それでもモルモン経を読み始めました。アルマ書を読んでいるとき、「聖霊が証をする温かい気持ちを感じました。」そう彼は語ります。ホベンシオと妻のセナイダ、そして8歳以上の子供6人が、バプテスマの日取りを決めました。

ところが、バプテスマの3日前のことです。「長年の酒飲み友達と商談の約束がありました。彼らからビールを飲むよう勧められ、断わりきれなかったのです」とホベンシオは語ります。

ホベンシオは姉妹宣教師に自分がしてしまったことを打ち明けました。「ふたりをがっかりさせたことは言うまでもありません。私は『妻と子供だけでも予定どおりバプテスマを受けさせてください。私は後で受けます』と提案しました。しかし、賢明な監督長老は、『それはできません』と言うのです。大変なことになりました。なにしろ私のせいで家族がバプテスマを受けられないのですから。私は必死でした。」1週間後、家族全員でバプテスマを受けました。

まもなくホベンシオは若い男性の会長に、セナイダは扶助協会会長に召されました。その後、ホベンシオが地区代表や伝道部長に召されたのをはじめ、ふたりは多くの責任を受けました。

イラーガン家族は多くの面で生活の

変化を実感しています。「私たちは、データ入力サービス事務所を営んでいます。納期に間に合わせるために、日曜日に働かなければならないことが何度もありました。しかし、教会に入ってから日曜日には仕事をしないと決めたのです。そのためいくつかの顧客を失いましたが、6日間の収入は、私たちが週7日間残業して得ていた収入をはるかに上回りました。」

データ入力サービス事務所のほかに、彼らはレストランもオープンできました。「しかし、日曜日には店を開けませんでした。またビールやコーヒーも扱いませんでしたし、たばこをはじめ、知恵の言葉に反すると思われるものは一切売りませんでした。『これでもレストランなのか』と言って立ち去るお客さんもいましたよ。しかし、私たちのレストランには家族的な雰囲気があって、そのために来てくれるお客さんたちもいたのです。」

数年後、彼らはレストランを売却し、ホベンシオはマニラにある教会の配送センターの責任者になりました。その後、会員統計記録とデータ処理の仕事に従事し、現在、彼は資材管理部の地域部長を務めています。

「福音によって夫は、180度変わりました」とイラーガン姉妹は語ります。「福音はかつて経験したことのない平安を与えてくれました。それは育ち盛りの子供たちの生活にも良い影響を与えてくれました。」子供たちのうち、多くがすでに伝道に出て、神殿で結婚しています。

ベルラとステーキ部長と自転車

モルモン経の証を得ると、ベルラはバプテスマを受けたいと思いましたが、



コンソラシオン・ペロベリオ(上)はワード部のホームメイキングを担当している。夫のイシドロは祝福師である。ホベンシオとセナイダ・イラーガン(中央)はフィリピン人としては2番目に伝道部長に召された。リンド・カシネリオ(右)は「忠実さは従う方法を見いだす姿勢を言うのです」と述べた。ある会員たちは、マヨン火山の溶岩流の噴出から救われた体験について語った。



両親が許してくれませんでした。彼女は28歳で、両親の許可は特に必要なかったのですが、やはり両親の感情を害したくはなかったのです。努力の末、彼女は自分の縫い上げた衣装でバプテスマを受けることができました。

什分の一をどのように納めるかも問題でした。ペルラは何年もの間、小学校の教師をしてひとりで家計を支えており、いつも収入のすべてを父親に渡していたのです。父親から自分の給与を取り上げたり、什分の一を差し引いてもらったりしようとは考えませんでした。その代わりに、彼女は学校から帰ってから編み物の仕事を始めました。そしてそれから得る収入のすべてを両方の収入の什分の一として納めたのです。

マニラ伝道部で伝道を終えて復職したペルラは、同じく小学校の教師である47歳の独身男性ルシアーノ・デ・グスマンに出会いました。そして彼も福音を学び、バプテスマを受けました。ふたりは結婚して、現在、ルツとエステルというふたりの娘がいます。

ルシアーノはバプテスマを受けて8年後、リングエンステーキ部のステーキ部長に召されました。ほかのフィリピンの指導者同様、グスマンステーキ部長は車も電話も持っていませんし、公共の交通機関を利用するほどの経済的な余裕もありません。しかし、自転車は持っていました。59歳の年齢で、集会に出席したり責任を果たしたりするために往復3時間も自転車に乗ります。しかも、ステーキ部長は弁当を持参します。「会員たちに食事の心配をかけたくないのです。」彼は語ります。

混雑したフィリピンの幹線道路を自転車で走るのはともすると危険が伴います。「しかし、……」と、グスマン

ステーキ部長は語ります。「私は主のみ業を行なっているのですから、主が守ってくださいます。」ある日、バスがジープニーを追い越そうとしたとき、自転車に乗ったステーキ部長は、その間に入ってしまいました。「だれもが私がひかれて死んでしまうと思いました。ところがそのとき、大風に持ち上げられるようにしてバスの進行方向からそれたのです。けがひとつせず、自転車も壊れませんでした。私が無事なのを見た人たちの驚きようは大変なものでしたが、一番驚いたのは私でした。」

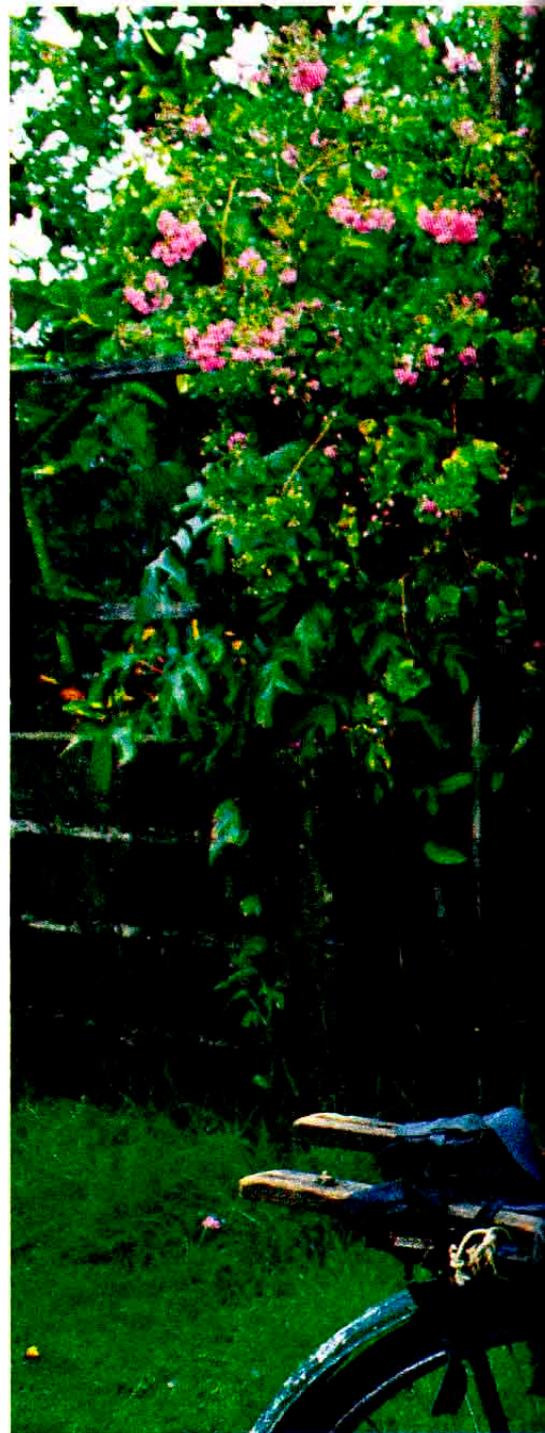
「赤ちゃんの声が聞こえました」

セブ市にあるモナレス家族の一部屋だけの家を訪ねるには、雑然とした狭い迷路のような路地を通らなければなりません。その小さな部屋に入ると、最初に目に飛び込むのは教会のポスターです。

小さな本棚の1段に、プレゼント用の新しいモルモン経がぎっしりと並んでいます。「息子が伝道中なんですよ」とサントス・モナレス兄弟は説明します。

家族を養うに足るだけの収入を願って、モナレス兄弟は露店で品物の売買をしています。妻のジュリエタと神殿参入についての話を始めた当初、ジュリエタは実現できるとは考えてもいませんでした。船旅に必要な資金を蓄えることさえ無駄に思えました。しかも夫のモナレス兄弟は、当時、長い間体を病んでいました。それでもふたりは協力して、何とか4人の子供たちと一緒に神殿に参入できるだけのお金を蓄えたのです。

ところが、モナレス姉妹が旅行のた





教会の責任で出掛けるグスマンステーク部長と、それを見送る妻のベルラとふたりの娘ルツとエステル(上)。神殿に入ったとき、「この世のすべての問題を忘れました」と述べるサントス・モナレスと妻のジュリエタ、14歳のハゼルと20歳のピセンタ(右)。





セサル・ディックホソとエレン(上)はマニラ神殿で結婚した。そこでは7つの言語でセッションが行なわれている。ロサリオ支部の会員たちは午前1時に家を出て、このジープニー(左)で神殿に向かう。参入者が多すぎて、セッションを受けるために2、3時間待たなければならないときがある。

めの食料を買いに市場へ行ったとき、持っていたお金を全部盗み取られてしまいました。旅行をあきらめようという考えがまた頭をもたげましたが、断食献金の援助を受けて食料を購入することができ、1990年4月、ついにマニラ神殿へ参入しました。

「神殿では、この世のすべての問題を忘れました」とモナレス兄弟は語ります。

20歳になる娘のピセンタも同感でした。「生まれてすぐに亡くなった弟との結び固めを受けたとき、赤ちゃんの声が聞こえました。」彼女にとって、それは弟が儀式を受け入れたことに対する証でした。

「主はなすべきことをすべて 行なっているか知っておられる。」

18歳のリンド・カシネリオ兄弟が教会を知ったとき、英語はあまりできませんでした。しかし、モルモン経はフィリピンの自国語のひとつであるセブアーノ語には訳されていないので、彼は英語版のモルモン経を読みました。「理解できませんでしたが、読み続けました。わかるまで読んだのです。」そう語る彼は、わずか数年でモルモン経を7回通して読み返し、今では英語が流暢にできるようになりました。

伝道から帰っても、リンドには1年以上も仕事がありませんでした。その後、収入の低い仕事に就きましたが、彼は完全に什分の一を納めました。「什分の一で大切なのは納めた額ではなく、主に示す信仰ですから。」

まだ独身だったときに、支部長にも召されました。「毎週日曜日は、朝早く教会に行かなければなりません。ところが、目覚まし時計がないんです。

それで、土曜の夜は蚊帳をつるさなかつたんです。蚊にさされて、日曜日に早起きできるからです。ばかげた話に聞こえますが、効果がありました。私は遅刻したことはありません。」

あるとき支部書記とふたりで、財政報告の金額が合わずに7時間も間違いを探し続けたことがあります。書記が夕食に出ている間のことです。「私は祈って始めなかったことに気付きました。私はひざまずき、天父に祈らなかつたことを謝りました。そして、主の助けを求めました。祈り終わって報告書をもう1度手にすると、誤りの箇所がわかったのです。」

リンドとアナベリエが結婚を決めたとき、リンドにはひとりで暮らせるだけの収入しかありませんでした。最初はアナベリエの両親も、支部の会員たちも、結婚にはあまり賛成ではありませんでした。「私たちは全力を尽くして戒めに従うと彼らに約束しました。そうすれば、主が私たちを必ず祝福してくださる、と言ったのです。皆、私を信頼してくれました。」

アナベリエは医療センターで良い仕事に就いていました。「でも予言者は『もしできるなら、母親は仕事のために家庭を離れるべきではない』と言われました。私たちは働かないようにという、妻に対する指導者のこの勧告を信じました。」彼らは恵まれて、カヒバンという息子を授かり、今ではリンドも良い仕事に就いて、家族は居心地のよいアパートで暮らしています。

限られたスペースと資金では、庭を持つのも食糧を手に入れるのも容易ではありません。しかしリンドはこう語ります。「監督は、庭を持つ場所があるかどうかの問題ではなく、教えに従う方法をいかに見付けるかが問題なの

だと言いました。」彼はとりあえず間に合わせの方法を考えました。「木材を手に入れて、箱を作ったんです。それから何度かバスで郊外へ出掛け、土を袋に詰めて持って帰り、野菜を植えました。」

1990年の地震のとき、幸いにも彼らはいくらかの米と缶詰を押し入れに貯蔵していました。アパートは壊れましたが、貯蔵食糧を一部回収し食べることができたのです。

「私たちは最善を尽くしました。」リンドは控えめな口調で語ります。「主はできることをすべて行なっているかどうかをご存じなのです。」

信仰の民

イシドロ・B・ペロベリオは祝福師であり、神殿の結び固めの儀式執行者でもあります。自国フィリピンの末日聖徒たちに祝福の言葉を授けながら、彼は「ときどき、自分でも驚かされることがある」と語ります。最近までフィリピンの地で地域会長として働いていた七十人のジョージ・I・キャノン長老はこう述べています。「フィリピン人は信仰の民です。彼らは霊的で、常に向上しようと努めています。教会にその答えがあると、彼らは考えています。」

イエス・キリストを信じる信仰を通して、フィリピンの人々は答えを見いだしているのです。□

* マービン・K・ガードナー——教会が発行する国際機関誌(「聖徒の道」はその日本語版)の編集副主幹。ユタ州バウンテフル・ハイトステーキ部バウンテフル第16ワード部監督。

フィリピンにまかれた福音の種

私たちはこの小さな島国についてしばしば耳にするようです。フィリピンの人々は次々に大きな問題に直面しています。

福音は彼らの生活にどのような影響を与えているのでしょうか。

自然災害

フィリピンでは毎年20件もの台風に襲われ、そのいくつかは豪雨、大風、洪水などの大災害をもたらします。活火山は時折、壊滅的な溶岩を吹き出し、地震も頻繁にあります。1988年にはわずか6週間の間に、3つの大きな台風とふたつの地震がこの地域を襲いました。

教会はどのように支援しているか

- 末日聖徒の集会所は、宗派にかかわりなく、被災者が食糧を受け取り、避難し、医療看護を受け、精神的、霊的な支えを得るための救援センターとして使用されています。
- 豪雨のため作物が収穫できなかった農民たちに、教会は種や支援物資を提供しました。
- 神権定員会とボーイスカウトは資材を集め、地震や台風で壊れた家を建て直す作業を支援しました。
- 1990年3月、大変な干ばつと電力不足に見舞われたとき、教会員は雨が降るように断食しました。翌日、雨が降りました。

経済的な問題

フィリピンは経済復興期にあります。その成長の度合いは決して早いものではありません。ひとり当たりの年収は731米ドルに相当します。教会の指導者に会員たちが抱える一番大きな問題について尋ねると、最も多く聞かれる答えは次のようなものです。「日々の命をつなぐこと自体、問題なのです。その日その日の糧さえ容易には得られません。」フィリピンの家族は人数が多いのが普通です。失業時などに必要に応じて助け合うため、親、兄弟の家族が同居することもよくあります。しかもその中で収入を得ているのはたったひとりで、それが十代の子供であったりするケースがよくあります。

フィリピンでは読み書きのできる人の割合は高く、約88パーセントに達しています。大学教育は重視されていますが、就職難は大学卒業者にとっても大きな問題になっています。

教会はどのように支援しているか

- 教会の指導者は、断食献金も含め、断食の律法を守るように教えています。
- 健康、栄養、衛生、予算管理など自立を促すレッスンが、すべてのワード部で継続的に教えられています。
- 会員の求職活動や雇用条件の改善を支援するために、夫婦の宣教師が就職関係のスペシャリストとして奉仕しています。
- 教会の指導者は、会員たちに地元の公共団体や政府が後援する職業訓練校へ入学するように勧め、そのための奨学金も提供しています。
- ある会員たちは組合を作り、藤かご、木製家具、コンクリートブロックなど

の商品を作っています。

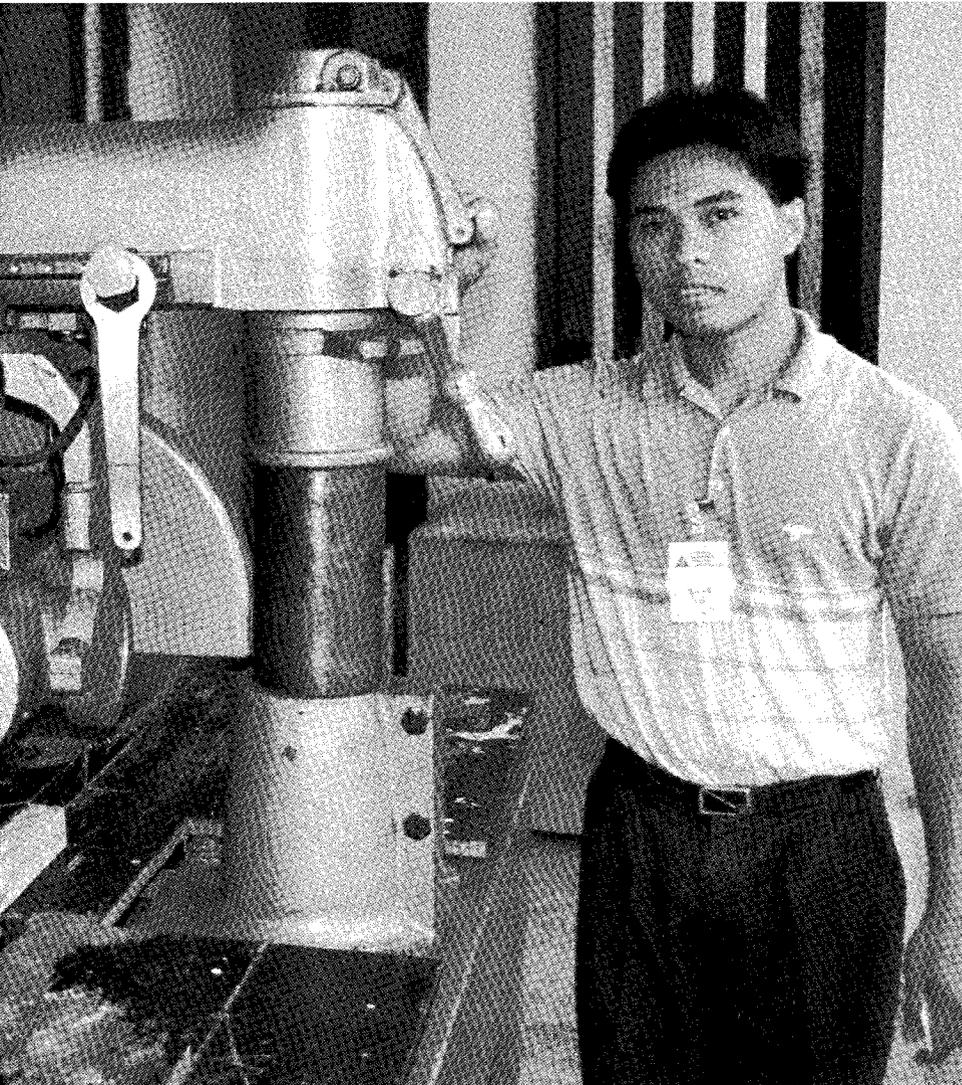
- 多くの集会所には庭があります。会員たちの緊急時の必要に使われるだけでなく、菜園技術を教えるためにも使われています。
- ミシシはどの集会所にも置いてあり、扶助協会のホームメイキングクラスで使い方を定期的に教えています。姉妹たちは家庭で裁縫ができるように習っていますが、その技術を応用して収入の足しにしている姉妹たちもいます。

政情不安

フィリピン諸島は1521年にマゼランによって発見され、1898年までスペイン人の支配を受けていました。その後、1946年まではアメリカ合衆国に領有されていました。独立共和国となっからは、この国は政情不安に悩まされています。様々な反政府グループが活動を続け、大変な不安と緊張を引き起こしています。

教会はどのように支援しているか

- 教会は聖徒たちに、法律に従い、支持するように奨励しています。(信仰簡条第12条参照)
- ほとんどの教会員は諸問題に対して立場をはっきりさせ、道路での検問や夜間取締命令などには、不便でも従うように努めています。
- 1989年12月に起きたクーデターの間、マクタン島の住民は、教会員であるなしにかかわらず、セブ島の集会所へ避難しました。セブ島の教会員は彼らを励まし、食糧を提供しました。「この経験は教会員と指導者の双方を強めました」とセブ島の地区代表レモス・ピリヤレテ兄弟は語ります。「教会員は



フィリピン諸島では、教会の指導者は若者に政府が後援している職業訓練校を卒業するように奨励している。帰還宣教師ですでに家庭を築いているベンジャミン・ジョソル Jr. は22人の生徒（うち15人が教会員）と共に職業訓練校で学んでいる。

次の安息日の証会に教会員でない人々も招待し、主への思いを分かち合いました。活発に集うようになったお休み会員もいます。」

●会員たちは主の守りがあることを証しています。ある人は、銃弾の飛び交う中を無事に脱出しました。ある人は愛する人を亡くした後に主の慰めを受けたと語っています。1989年12月、反政府軍は神殿に乱入しようとした。神殿職員が入らないように説得しましたが、軍はしばらく神殿の別館に隠れていました。小ぜり合いの間、別館の外壁に若干の損傷を受け、神殿職員の住居施設は大きな損傷を受けました。しかし、奇跡的に神殿は無事でした。

言葉の問題

この小さな国では87種類の言語ならびに方言が使われています。第2言語である英語は、人口のほぼ半数が使用し、共通語の役割を果たしています。しかし、用途は限られており、会員たちの中には教会に出席しない理由として言葉の問題を挙げる人々があります。多くの宣教師は、たとえ地元のフィリピン人宣教師であっても、新しい言葉を学ばなければ完全な意思疎通はできません。

教会はどのように支援しているか

●会員たちは集会では自分の使用言語で話すように奨励されています。レッスンや教会での話は、大抵の場合、英語と地元の言語の両方が使われています。

●モルモン経と若干の教会の出版物は、フィリピンで最もよく使われている8種類の言語に翻訳されています。□

やがて100万人を数える フィリピンの末日聖徒

現在フィリピン諸島には25万人以上の教会員がいます。4年ごとにその数は倍増しています。1990年代の終わりにはフィリピンの末日聖徒の数は100万人に達するでしょう。

著しい発展の要因は何でしょうか。おもな要因は、フィリピンはほかのアジア諸国とは違いキリスト教国家であるという点にあります。フィリピンは過去4世紀にわたってスペインやアメリカの支配下にあったため、90パーセント以上の人々がクリスチャンなのです。現在の地域会長のL・ライオネル・ケンドリック長老はこう語ります。「彼らは霊的な事柄に敏感で、感受性が強く、信仰あつい民です。」

もうひとつの理由に、フィリピンの人々の分かち合いの精神が挙げられます。ある宣教師は次のように言っています。「どの教会員にも宣教師に紹介できるような教会員以外の友達や親戚しんせきがいます。教会員が求道者を大勢紹介してくれるんです。」

地域会長会の一員であったジョージ・R・ヒルIII長老は、「家族に焦点

を絞ることによって大きく成長してきました」と語っています。専任宣教師は伝道時間の30パーセントをお休み会員の活発化や指導者の責任のために使うように言われています。バプテスマの数は、今もなお増え続けています。

このような発展を迎えるまでには、どのような経緯があったのでしょうか。

●1945年、第二次世界大戦中に軍人支部がいくつか組織されました。アニセタ・ファハルド姉妹は、赤十字軍で働いていたマクシーン・グリム兄弟から福音を学び、フィリピン諸島における最初の末日聖徒としてバプテスマを受けました。

●1953年の朝鮮戦争の間、アメリカ人兵士はフィリピンに再び行き、軍人地方部が再組織されました。

●1955年、ジョセフ・フィールディング・スミス長老が福音を宣べ伝えるためフィリピン諸島を奉獻しました。しかし、査証制限によりまだ伝道活動を始めることはできませんでした。

●1961年4月28日、ゴードン・B・ヒンクレー長老は幾人かの会員と共に、マニラにあるフォートマッキンレー戦没者記念墓地で、主のみ業を行なうための特別な祈りを捧げ、その1週間後に宣教師たちがフィリピンに到着しました。現在伝道部長を務めているルー

ベン・ガビス長老は、フィリピンの初期の教会員のひとりです。彼はこう語ります。「墓地での祈りの中で、ヒンクレー副管長は多くのフィリピン人が改宗し、この地で教会の指導者になるように祈ってくださいました。預言は現在成就しつつあります。」

●ほんの30万平方キロメートルの小さな国に、現在12の伝道部があります。専任宣教師1,650人のうち1,250人以上がフィリピン人です。伝道部長は5人、地区代表は全員がフィリピン人です。また、ステーク部長40人のうち39人が、地方部長は60人全員がフィリピン人です。

●セミナーおよびインスティテュートの登録者数は、現在1万5,000人に達しています。

●マニラには家族歴史サービスセンターがあり、ほとんどすべてのステーク部といくつかの地方部には家族歴史図書館分館があります。

●12ある伝道部で80組の夫婦の宣教師が召され、経験の浅い指導者たちを訓練しています。

●現在フィリピンでは、地元の安価な原材料を利用して、標準よりはるかに低コストで小さな集会所を建てています。フィリピンでは交通機関の料金が高いため、会員たちは自宅の近くに教会が建つことをとても喜んでいます。□

多くのフィリピン人の宣教師と同様、ダバオ伝道部のドミナードル・キャティ Jr. 長老(左)とレスティチュト・バジャリン長老の両親は教会員ではなく、彼らは最近の改宗者である。フィリピン諸島の12の伝道部では、ほとんどの宣教師がフィリピン人である。





ラドミラ・ラノビッチ

自分自身で知ることができる

ケネス・S・ロジャーソン

ラドミラ・ラノビッチは、ユーゴスラビアで学校に通うよりもスイスで両親と一緒に暮らす方を選びました。しかし、それが彼女の人生を変えるきっかけになるうとは思ってもみませんでした。

家族がユーゴスラビアからスイスに引っ越したとき、ラドミラは14歳でした。彼女はスイスの学校に行ってもユーゴスラビアと大して変わらないだろうと思っていました。しかしスイスに移って4年後、宣教師が彼女の家を訪れました。

「私はひとりっ子だったので、両親は私だけをユーゴスラビアに残しておきたくなかったのです」とラドミラは語ります。「振り返ってみると、天父が私にスイスでの暮らしを望んでおられたに違いないと思います。きっと私はそこで福音を受け入れるように備えられていたのです。」

ラドミラはユーゴスラビア中部にあるサラエボ市で生まれ育ちました。学校では、宗教は必ずしも必要ではないと教わりました。父親は神を信じていませんでしたし、母親はある教会に属していましたが熱心な信者ではありませんでした。「私は聖書がどんなものかさえ知りませんでした」とラドミラは笑います。「ダビデとゴリアテについては聞いていましたが、ギリシャかローマの神話に出てくる登場人物だと思っていました。」

しかし、スイスの学校では信仰熱心な人々にも会いました。そして、彼女自身も神やイエス・キリスト、人生の目的について考えるようになりました。ちょうどそのころ、彼女はフィンランドのある組織を通して知り合ったペンフレンドと文通を始めました。文通相手はニュージーランドに住む少女で、教会員でした。彼女は宗教について手紙に書いてきたことはありませんでしたが、スイスにいる友達がラドミラの家を訪問するであろうと書いてきました。ラドミラは喜びました。

数カ月たった1974年9月、身なりのきちんとした4人の青年が戸口に現われました。ラドミラはこう言いました。「まあ、ようこそ。ずっとお待ちしていたんですよ。

どうぞお入りください。」ラドミラの歓迎振りに喜ぶ4人の表情を思い出して、ラドミラは笑みを浮かべます。

しかし、彼らがニュージーランドへ行った経験がなく、モルモン教会を代表して来ているのがわかると、彼女は教会の話には興味がないと告げました。すると意外にも礼儀よく立ち去ろうとするので驚いていると、帰り際にひとりの宣教師が尋ねました。「ところで、あなたはクレシミル・チョスイッチを知っていますか？」

そのひと言がすべてを変えました。ラドミラは答えました。「ユーゴスラビアでは皆クレシミルを知っているわ。ユーゴスラビアではまさにスポーツのヒーローですもの。」

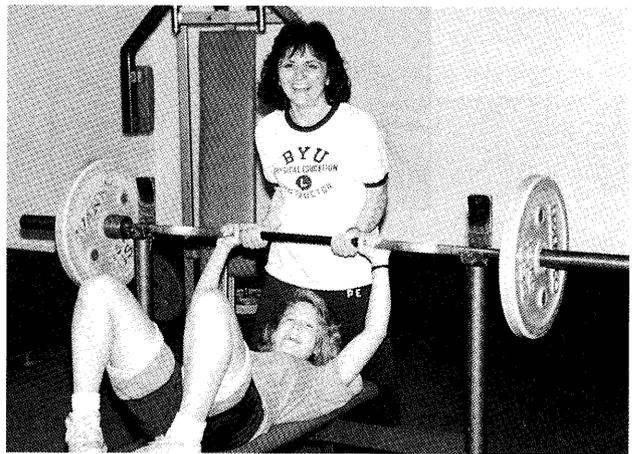
1970年代の初め、ブリガム・ヤング大学のバスケットボール選手であったクレシミル・チョスイッチは、バプテスマを受け教会に入りました。その後ユーゴスラビアに戻り、ユーゴスラビアの代表チームに加わりました。そしてチームが世界選手権で優勝したときも、1980年のオリンピックで金メダルを獲得したときも活躍しました。

「私は、なぜ宣教師が彼のことを知っているのか不思議に思いました」とラドミラは語ります。宣教師は、チョスイッチ兄弟とブリガム・ヤング大学や教会との関係について話しました。その後でラドミラは近くの支部の集会に招待され、行ってみることにしました。

アパートの地下の小さな礼拝堂に入ったラドミラが、最初に目にしたのは「神の栄光は英智なり」という聖句でした。

「すぐさま深い感銘を覚えました」と彼女は語ります。「宗教を信じる人は知性的ではなく、学ぼうとしないのだといつも教わってきました。けれども私は学びたかったのです。」その集会はモルモン経に関するものでした。「その集会全体にわたって、モルモン経が真実かどうか

改宗したときから、ラドミラは二度とたばこを吸いたいと思いませんでした。
現在彼女はブリガム・ヤング大学の物理療法学の修士課程を修了しようとしているところです。



自分自身で知ることができるという点に的が絞られているようでした。それが真実だとだれかに言ってもらう必要はなく、自分で学び神様に尋ねることができるということです。」ラドミラはこのように述懐しています。

彼女はドイツ語のモルモン経を受け取り、家に持ち帰りましたが、本棚にしまい込んでしまいました。

数カ月後、クリスマスの季節になり、ラドミラはイエス・キリストについて以前にも増して耳にするようになりました。キリストの生涯についてのテレビ番組があり、人々の会話にもキリストのことがよく出てくるようになりました。彼女はキリストについて学びたいと思い、モルモン経をしまい込んであったのを思い出し、読み始めました。「あのときの私には、モルモン経がまったく理解できませんでした。」彼女はこう回想しています。「ドイツ語がむずかしすぎたのではありません。それまで聞いたこともない『悔い改め』などの言葉が、理解できなかったのです。」

彼女は、宣教師と連絡を取って助けてもらおうと決心しました。ちょうどそのころ、ふたりの新しい宣教師が求道者の記録の中からだれを訪問すべきか、導きを求めて祈っていました。ふたりは共に、ラドミラが彼らを必要としていると感じました。宣教師が訪問したとき、彼女はドアを開け、再び「どうぞお入りください。あなた方をお待ちしていました」と言ったのです。

彼女は、依然として宣教師のレッスンを受けるつもりはありませんでしたが、彼らと一緒に勉強することにしました。毎週モルモン経を10章読み、自分の考えを書き出し、それについて宣教師と話し合うのです。

「ときどき彼らを困らせるような、また、さして重要でもないような質問をしましたが、宣教師は忍耐強く答えてくれました。あるとき彼らに『今週は読んでいないから帰ってください』と言ったことがあります。すると彼らは『一緒に読みましょう』と言ってくれました。私たちはアンモンについて読み始め、しばらくすると彼らは『もう帰らなければなりません』と言いました。信じ

られないことでしたが、私はそのとき初めてみたまを感じ、またモルモン経を読んで心を動かされていました。そして宣教師が帰るとすぐ自分の部屋でその話を最後まで読みました。」

ラドミラはモルモン経について祈り始めました。ある日のことでした。ニーファイ第三書の、救い主がアメリカ大陸を訪れた箇所を読んでいたとき、突然これは実際に起こった出来事だと非常に強く感じました。救い主の存在を実感し、もう否定できませんでした。「すべては理にかなった正しいことでした」と彼女は語ります。宣教師は再び訪れた際、聖霊が祈りにどのように答えてくれるかを説明しました。続いて、彼女はバプテスマチャレンジを受け入れました。宣教師は「そうなるとあなたに私たちの用意している話を聞いてもらう必要がありますね」と言いました。

「私はすべて真実であるとわかっていたので、什分の一や知恵の言葉など、すべての戒めを最初から受け入れることができました。そのときから二度とたばこを吸いたいと思いませんでした。」

ラドミラは、スイスのチューリヒで1975年2月22日にバプテスマを受けました。その後、彼女は教会が組織されたばかりのユーゴスラビアのベオグラードへ戻りました。1981年にはユーゴスラビアからの最初の宣教師として召され、カナダのモントリオールで伝道しました。現在、彼女はユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学で物理療法学の修士課程を終えようとしています。また、教会の出版物をユーゴスラビアの公用語であるセルボ・クロアチア語に翻訳する手伝いもしています。

ラドミラはこれまでのことを振り返って「私の人生に天父が多くの奇跡を起こされたと感じます」と語っています。

彼女は、かつて神の存在を疑問に思っていました、今や神が自分に深い愛を注いでおられることを知り、あらゆる方法で神に仕えたいと望んでいます。□

豊かな愛



「**今**の世の中にあって自分の役割を静かに果たしている女性こそが偉大なヒロインなのです。」中央扶助協会会長のイレイン・L・ジャック姉妹は、そう語ります。「様々な地域に住む……女性である皆さんは、人に称賛されることはほとんどないでしょう。夫を支え、子供を育て、両親の世話をしながら、隣人のために働き、学校や地域団体の役員を務めるなど、家の内外におけるこの世のいろいろな仕事を通して、毎日主への愛を示しているのです。」(『「はつきりと私たちに示されている」こと」「聖徒の道」1991年1月号, p. 101)

愛はかなめ石

愛は扶助協会にとって、アーチを支えるかなめ石のようなものです。かなめ石は建築物の中にあって、アーチを成すほかのブロックをがっしりと支えています。正しい位置にかなめ石がないと、アーチは崩れてしまいます。同じように、人と人とのつながりを強め、救い主と私たちを個人的に結び付けてくれるものは、愛に満ちた思いと行ないです。

愛ある行ないをする機会是我们的の周りにいくらでもあります。では、何から始めればよいのでしょうか。教会の広報部地域担当課の課長ウィリアム・S・エバンズ兄弟は次のように提案しています。

●隣り近所や地域社会で、ワード部や支部で、家族や友人、知人の中から始

める。

- 必要を満たし、自分の関心や才能、趣味を生かせる奉仕の機会を捜す。
- 学校などで役員を引き受ける。文化的な活動に協力する。環境改善に取り組む。障害者や高齢者、貧しい人々などを助ける。

どのようにすれば愛を生活の中のかなめ石にできるでしょうか。

愛は努力して育てる

予言者モロナイはここで採り上げているような愛を「キリストの純粋な愛」と呼んで、次のように記しています。「この愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈れ。」(モロナイ7:47-48)

「女性が愛と思いやりを抱くのは自然なことである。」予言者ジョセフ・スミスはこのように語ったとき、行ないについて強調していました。「あなた方は今や、神があなた方の胸に植えられた思いやりの心に従って行動できる場を与えられている。」(教会歴史4:605)実際、愛を行ないに表わすことによって、私たちの心は変化します。

運動によって筋力を強めることができると同様、愛も、増し加えることができるのです。

どのような愛ある行ないを、自分の生活習慣の一部にできるでしょうか。

愛はひとつの生き方

主は愛ある人が持ついくつかの特質を示しておられます。愛があれば、不正を喜ばないで真理を喜び、すべてを負い、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐えます。(モロナイ7:45参照)恨みを抱かず、相手から傷つけられてもそれを赦し、思いをコントロールします。

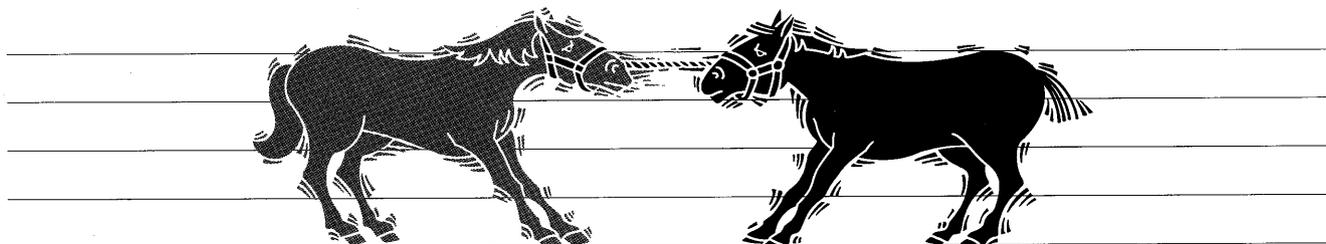
愛があれば、受けるときにも喜んで受けます。ある活動的な姉妹は、病気にかかったとき面倒をみてもらうのを一切断わったことがありました。彼女の監督は賢明にも次のように助言しました。「この点を忘れてはなりません。援助を快く受け入れることで、相手を助けているのです。世話をしてもらって、そうした人々に祝福を受けさせてあげてください。」

愛をもって奉仕し、愛の賜を祈り求めていくならば、モルモンが約束したように、「神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満

私たちはどのような愛の特質を伸ばすべきでしょうか。□

やさしい教え

マーサ・マクファーレン・ワイザー



押し付ける代わりに忍耐を。 それが理想の結婚生活につながります。

多くの末日聖徒の夫婦が一度は考えることがあります。それは「夫は(妻は)自分と共に霊的に成長しているだろうか。ふたりは霊的に対等なレベルにいるだろうか」という質問です。

結婚生活に入って間もなく、私はこのような質問を自分に投げ掛けては、感じる答えに失望することがよくありました。夫は子供にとってはすばらしい父親でしたが、私はイライラして怒りっぽくなることがよくありました。自分が望むイメージどおりの夫になってもらいたかったのです。夫に求めるはっきりした理想と目標がありました。

ある日、助言を求めて父を訪ねました。精神分析医をしてきた父のことだから、娘の夫をあまり辛らつに批判したりはしないだろうという予測はしていました。しかし、父の最初の言葉に、私は頭から冷水を浴びせられたような気がしました。父はこう言ったのです。「マーサ、こんなことを続けていたら、彼を自分のもとから追い出してしまうことになりかねないよ。」

私はショックを受けて、「それはどういう意味なの」と尋ねました。話はまったく思い掛けない方向に進んでいきました。

父は、手を伸ばして私の憤りを静めながらこう話してくれました。「と言うのはね、先日、ある末日聖徒の女性のカウンセリングをしたんだ。結婚生活は特別悪くはなかったんだが、彼女は夫が教会の教えを完全には実践していないと感じていてね。何とかしようと何年も文句

を言ったり頼み込んだりしたが、うまくいかなかった。そこで自分が家を出てしまえば、戻ってもらおうとして夫が変わってくれるんじゃないかと考えたんだ。まさか夫が、自分があるがままに受け入れて愛し尊敬してくれるほかの女性を見付けようとは思ひもしなかっただろうね。結局、夫は離婚後、再婚して幸せになり、彼女は立ち直れないほどのショックを受けたんだ。」

どうして、私がこんな説教をされなければならないのでしょうか。夫と別れることなど考えたこともなかったのです。「お父さんは、私が自己主張をやめて、理想を捨てるべきだと言うの。」私は身構えながら聞き返しました。

「いや、そうじゃない。導くのはいいが押し付けになってはいけないと言っているんだ。彼の長所や努力を認めながらやさしく導くことさ。そして、批判をやめて良い模範になるんだ。自分の目標達成を焦るあまり、彼に、自分は妻にふさわしくないという印象を与えてはいないかな。マーサ、彼はいい人だ。そして彼は、おまえもそう感じているのを知りたがっているとは思わないかい。」

私はしばらく口もきけず、目に涙を浮かべて座っていました。どうしたらいいかわかりませんでした。父の言っていることはわかるのです。しかし、夫には私の理想の夫になってほしかったのです。

父は、また別な方法で説明してくれました。「ネズミを2匹荷馬車につないだ農夫の話聞いたことがあるかい。農夫が荷馬車に乗り込むのを見て、近所の男が笑い

ながら尋ねたんだ。『この小ネズミに荷馬車を引かせようなんて、本気で思ってるんじゃないだろうな。』農夫はこう答えたのさ。『なぜだい。むちを使えば大丈夫だよ。』

私は、心ならずも笑っていました。荷馬車に乗って、むちを振っている自分の姿がはっきり目に浮かびました。怒りと不満というむちを使って夫を変えようと、この農夫と同じことをしていたのです。

「わかったわ。私は少し押し付けがましかったようね。だけど、私が期待している程度に奥さんをリードしている男性はたくさんいるわ。それを彼に期待するのはそんなに悪いことなの。」

父はやさしく、しかしきっぱりと答えました。「おまえは間違った態度で問題を解決しようとしているんだよ。結婚生活の中で一番大きな危険のひとつは、伴侶の一方が自分たちの結婚は正しかったのかと疑い始めたときだ。お互いの関係を良くする努力をしなくなれば、結婚が破綻するのは時間の問題だからね。」

「でも、お父さん。彼を愛しているからこそがっかりしてしまうの。彼には彼自身の可能性をもっと伸ばしてほしいの。」

「大事なのは、忠実であることさ。すべてそれにかかっている。不忠実というのは、思いから始まるものでね。夫をほかの人と比較すること自体、本当は不忠実な行為なんだ。」

私に勝ち目がないのは明らかでしたが、最後にもう一度だけ、反撃を試みました。「私は、彼に永遠に付いて行くつもりよ。彼の神権者としての日々の選びが、家族の永遠の行く末に影響を与えるのよ。」

「忍耐と愛も永遠のものだよ。」そう言うと父は聖典を開いて声に出して読みました。「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、また維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。」

また、親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。」(教義と聖約121:41-42)

この聖句は知っていました。神権者が正しくない支配をすることを戒めた聖句です。父はどうしてこの聖句を

聞かせたのでしょうか。

「この聖句には、どんな人間関係も成功に導く原則が書いてある。特に、夫婦関係をね。結婚における大切な責任のひとつは、性格や背景、感じ方など、すべての相違点を受け入れることだ。その上で、同じ目的に向かってひとつに結ばれるように努力することだよ。もちろん簡単なことではないし、一生かかるかもしれない。しかし、おまえも言ったように、結婚は永遠に続くものだからね。」

そして、父が子供のころ知っていた農夫について話してくれました。その人は、アリゾナ州北部に野性の馬を捕まえに行きました。野性の馬は、だれでも自由に捕まえられることになっていましたが、飼いならして訓練するのは骨の折れる仕事でした。この農夫のやり方はこうでした。夜遅く、群れの一部を集めて、水場近くの仮設のさくに入れます。その中で一番良い馬を選んで首に縄を結び、もう一方の端をよく飼いならされた強いラバの首に結び付けて、2頭がやっと並んで走れるような長さにしてやり、そのまま砂漠に放置してくるのです。そして、この2頭は協調することを学ぶのです。

ラバは家に帰る道を知っていて、その方向に進もうとします。馬が別の方向へ行こうとすれば、ラバは断固そうさせまいとするし、ラバが道をそれそうになると、馬が動こうとしなくなります。そうこうしながら、2頭は互いの違いを乗り越えて、2週間以内には雨露をしのげ、食べ物のある家へ足並みをそろえて帰って来るというのです。そのころには、馬は訓練を始める準備ができていて、2頭はまるで以前から共に育ってきたかのように振舞うのだそうです。

父はこう付け加えました。「もう少しで、一番大事なことを言い忘れるところだった。馬とラバの首をつないでいたロープは、とても柔らかいものだったそうだよ。」

この話と、先の聖句の関連が私にもわかりかけてきました。ラバのように頑固であれ、という意味でないことは確かです。つまり結婚は、あのラバと馬を結び付けていたロープと同じように、共通の目的のために私たちをしっかりと結び付けているのです。私たちは、最終目的地を知りながら、必ずしもいつも同じ方角に、同じペースで進むとは限りません。私たちを結ぶロープが、愛、

忍耐、忠節、信仰という柔らかな素材でできていれば、傷つけ合うことはありません。もしロープが固すぎれば、苦痛に耐えかねてどちらか一方がロープを切ってしまうかもしれません。

私にはわかっていなかったのです。夫が力強い指導力を発揮し、自分は一步下がって、目標や理想に向かって夫に導かれるのを、私は本当に望んでいたでしょうか。また夫は、私のしつような熱意に振り回されるのをどう感じていただろうと思いました。

私は、教義と聖約121章の最後の6節を新たな気持ちで学び直しました。そこにある原則は、私の結婚生活を堅固に、そして豊かにしてくれました。伴侶のどちらかがお互いの関係に満足していないときには、相手を責めてしまいがちです。私がしていたのは、まさにそれでした。

私の友人で、同じ原則を使って問題を解決した人がいます。アンとボブは神殿外の結婚だったので、神殿で結び固めを受けるのを目標にしていました。しばらくはふたりとも教会に活発に集っていましたが、次第にボブが興味を失っていきました。スポーツ好きの仲間と一緒に、テレビでスポーツを観戦しながら、日曜の午後を過ごすのを楽しみにするようになりました。

アンは、日曜日になると朝早く起きて、家族のために朝食を作り、台所を片付けると身仕度を済ませ、小さなふたりの子供にも教会に行く準備をさせました。そしてボブにキスをしてほほえむと、教会に出掛けました。ボブが家で子供の面倒を見ると言ってくれたのですが、アンは幼い子供たちと聖餐会せいさんに出席し、ひとりで面倒を見る方を選びました。

彼女はこう言っています。「私は自分がボブと子供たちの良い模範になることが必要不可欠だとわかっていました。ボブを信じ続けることによって、彼がいつか教会に戻ってくれるように祈り続けました。教会から戻ると、家に入る前にちょっと立ち止まり、否定的な思いを捨てて、ボブをどれだけ愛しているか思い出すようにと努めました。時には、居間にポップコーンやジュースの空き缶が散乱していたりしましたが、絶対にそんなことで腹を立ててふたりの関係を壊したりはすまいと心に決めていました。」

ボブの承諾を得たアンは、自身のエンダウメントを受

けるために神殿へ入る準備を始めました。そんな彼女を見て、ボブも福音の原則をほんの少しずつ守り始め、次第に家族と一緒に教会に集って、アンと共に神殿参入のために備えるようになりました。そしてついに、家族で永遠の結び固めが受けられるまでになったのです。

「ボブは、私が福音によって変わっていくのを見たのでしょうか。また家族が成長しているのにも気付いたのだと思います。だからこそある日、皆のようになると決心してくれたのです。」アンはそう語ります。

家庭に神権者の強い指導力を望む末日聖徒の女性は多くいます。しかし、家庭に対する責任は、夫と妻の両方にあるのではないのでしょうか。たとえば、家庭の夕べを確実に開くようにするのはだれの役目でしょうか。夫だけの責任でしょうか。妻には、その責任はないのでしょうか。妻が自分の霊的成長よりも、夫の霊的進歩に厳しいという傾向は、多くの姉妹たちに見られる共通の弱点ではないのでしょうか。

私は今では、教義と聖約121章46節の約束は家族のためのものであると思っています。この祝福を受けるには、時間、努力、そして忍耐が必要ですが、祝福はそうした努力に十分見合う素晴らしいものです。

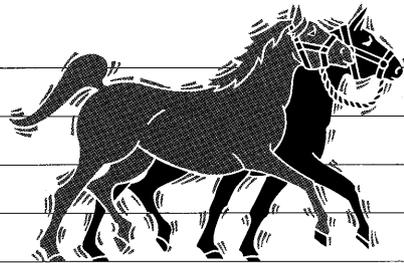
「聖霊は常に汝の伴侶となり、汝の笏しやくは真理と正義の変ることなき笏となり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」(教義と聖約121:46)

やさしい教えによって私の生活を大きく変えてくれた父に、心から感謝しています。17年間の結婚生活の中で、夫と私が深い愛と尊敬の気持ちを持ち続けることができたのは、父の助言のおかげです。

私が支配的な態度をとりそうになるたびに、父の言葉が聞こえてきます。「マーサ、彼はいい人だ。彼はおまえもそう感じていると知りがっているとは思わないかい。」

ありがとう、お父さん。お父さんの言ったとおりでした。□

* マーサ・マクファーレン・ワイザー姉妹——ユタ州デルタステーク部デルタ第7ワード部所属。



伴侶との関係を 改善するには

ハワード・C・マクファーレン

夫 婦のどちらかが感情的な言葉を口に出し、それに応酬するという、夫婦のきずなを弱めてしまう悪循環は自分で断ち切ることができます。以下の提案の各項目を、週ごとに別の項目に重点を置きながら試してみてください。夫婦のきずながそれによってどれほど深まるかを知って、きっと驚くでしょう。

1. 否定的な考え方を避ける。自分の夫や妻を他人と比較しないようにしましょう。それよりも伴侶に関して、あなたが好きな点や感謝している点を思い浮かべましょう。そしてそれらを書き出しておいて、思い付くたびに書き加えていってください。

2. 批判を避ける。人前で自分の夫や妻を批判してはいけません。また、回りの人々があなたの伴侶のことを悪く言うのを黙って聞いていないで、むしろ人前で夫や妻の良い点を言うようにしましょう。特に伴侶と一緒にいるときにはなおさらです。そうすることによって、お互いに対する誠実な気持ちを再確認でき、自尊心も高められることでしょう。

3. 毎日相手のために良いことをする。ココアを作ったりあげるとか、何か気の利いた言葉を書いて置いておくとか、伴侶が普段ひとりでやっている雑用を手伝うとか、

いろいろ工夫してみてください。しかし自分のしたことをいちいち書き留めておく必要はありません。

4. 結婚生活のために、時間を割いたり努力をすることに限度を設けない。愛は五分五分の責任を果たすだけで存続するようなものではありません。結婚生活のために貢献している「量」は測るべきではありません。

5. 無理な要求を押し付けない。無理な要求は何にも増して相手の憤慨、強情といった態度を引き起こします。

6. 柔和な態度をとる。柔和とは弱さだと思っている人が大勢います。しかし、本当は力なのです。柔和になることによって、一層素直になり、良い対人関係を築くことができます。

7. 聖典の中で慈愛について書かれている箇所を研究する。聖典を読むことによって、永遠の愛についての理解を深めることができます。□

*ハワード・C・マクファーレン兄弟——前記事を書いたマーサ・ワイザー姉妹の父親。医師。ユタ州ジョーダNSTEAKY部で末日聖徒の薬物とアルコール中毒に関するプログラムの地区ディレクターを務め、またジョーダンリバー神殿で奉仕をしている。

重要でないと思われた聖句から

キム・R・バーニンガム

何年か前のことですが、その週の日曜学校のレッスンを準備し始めたとき、私は採り上げる内容が教義と聖約の10の章にわたっていることを知って驚きました。「短いレッスン時間にそんなに多くのことを盛り込むなんて無理だよ。何章かは省略しなきゃ」と思いました。

その週の初め、私は111章は省略しても構わないだろうと心に決めていました。「愚なること」「宝」「金銀」「昔よりの住民」などの言葉は、意味がよくわかりませんでした。正直に言うと、この章が何について記されたものなのか私は理解していませんでしたし、特に重要とも思いませんでした。

その週の後半に、その章を読み返して、「愚なること」が一体何を意味するのか考えました。おそらく「愚なること」とは大管長会がマサチューセッツ州サレムに行った理由と関係があるのではないかと思います。

その啓示の前書きを読み、その出来事についてさらに調べるにつれて、バージェスという男性がカートランドにやって来て、サレムにおける1軒の家に多額のお金が隠されていると触れ回ったことを知りました。

予言者ジョセフ・スミスと何人かの人々は、そのお金を見付けて教会の債務の返済に充てられればと願いながらサレムに向かいました。しかし、宝があるのはどの家なのかをバージェスが指示できなかったため、一行のサレムへの旅は結局「愚なること」となったのでした。

このような事情にもかかわらず、主はその旅について「立腹せず」と言われています。(教義と聖約111:1)主は予言者に、求めている「金銀」ではないほかの「宝」があることを心に留めるように言われました。すなわち「この市には、シオンのために汝らに与うる宝多くあり。

また汝らの媒ちによりて時至らばシオンの為にわが集めんとする多くの人々この市にあり。」(教義と聖約111:2)

調べるにつれて、宣教師のエラスタス・スノーが結果的に重要な鍵となったことがわかりました。スノー長老の日記によると、彼は1841年(教義と聖約111章となっている啓示が与えられてから5年後)にノーヴーへの帰郷の途に就きましたが、途中でハイラム・スミスをはじめとするほかの宣教師たちに会いました。ハイラム・スミスはスノー長老とその同僚のウイリヤム・ローに対して、帰郷の旅を取りやめにして、サレムで伝道の業に従事するように促しました。

スノー長老は次のように書いています。「ふたりは、1836年にサレムの人々について与えられた啓示の写しを置いていった。主はその啓示の中で、時が至れば主の王国に集められる人々がそこには大勢いると言っておられ、ふたりはすでにその時が来たと考えていたのである。」(「エラスタス・スノーの日記」末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部所有、pp. 3-5参照)こうしてスノー長老はサレムに赴きました。

初めは重要でないように思われた聖典の箇所は私にとってますます興味をそそるものとなってきました。教師用手引きにはスノー長老が多くの人々を改宗したと記されています。その改宗者とはどんな人たちだったのでしょうか。彼らは教会にどんな貢献をしたのでしょうか。

突然私は自分の家族の系図記録の中で見たあることを思い出しました。私の4代前の先祖であるナサニエル・アシュビーは1805年にサレムで生まれています。おそらく彼はスノー長老が福音を伝えたときサレムにいたことでしょう。私はアシュビー家の歴史記録を探しました。



そしてその記録が記された小さな茶色の本を、私の親類の家でようやく見付け出しました。

教義と聖約111章9節で主は予言者にサレムの「昔よりの住民とに就きては、努めてこれを取調べ」るべきであると言われました。海岸沿いの町であるサレムは1626年に開拓されました。そしてナサニエル・アシュビーの6代前の先祖アンソニー・アシュビーが、1663年にサレムにいたと記録されていました。つまりアンソニー以来アシュビー家は6世代にわたってサレムに住んでいたのです。

その小さな本(ロバート・アシュビー、「アシュビー家の先祖」, 1941年)には次のように書かれていました。「1841年にエラスタス・スノー長老たちはアシュビー家に真の福音をもたらし、彼らは喜んでそれを受け入れた。」なんと私の先祖もあの「サレムの改宗者たち」に含まれていたのです。

ナサニエルとその家族について読んでいくと、スノー長老夫妻はサレムにあるアシュビー家の家屋のひとつに2年間無料で住んでいたことがわかりました。おそらくそれは宣教師にとっては「金銀」に勝る「宝」だったでしょう。1843年の秋、アシュビー家はノーヴーに移り、スノー長老の家族と共に大きな2世帯用住宅に住みました。またアシュビー家の人々は神殿の建設のために自分たちの財産を差し出しました。

アシュビー家の人々は、ジョセフ・スミスが殉教した日にはノーヴーにいました。しかも予言者の家のすぐ近くに住んでおり、ナサニエルの息子たちのひとりが記したところによると、彼が1844年6月のある朝、父親の菜園にいと、予言者がカーセージに向かって馬に乗って通り過ぎたとあります。その息子はこう書いています。

「私は、彼の気高い顔を覆った深い悲しみを決して忘れないだろう。それは生きていた予言者に会った最後であった。」

アシュビー家の人々は、ブリガム・ヤングが^{へんぼう}変貌したとき会衆の中にいました。ナサニエルの息子のベンジャミンは次のように書いています。「ブリガム・ヤングの姿、声、^{ようぼう}容貌が会衆の目の前で変わり、細部に至るまでジョセフ・スミスそっくりに見えた。ジョセフ・スミスの面影をはっきりと見たのはそれが最後となった。」

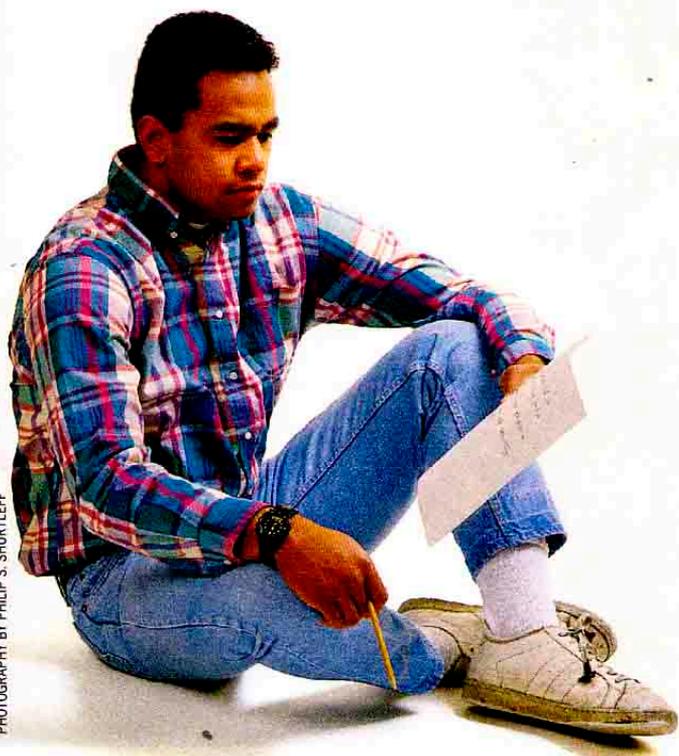
アシュビー家はまた、ノーヴーに自分の家を残して西に向かって旅立った人々の中にもいました。数日後、ナサニエルはアイオワ州で亡くなりました。しかしスーザン・アシュビーは11人の子供と共に旅を続け、平原を渡り、ソルトレークシティに到着しました。アシュビー家の娘のひとりが私の曾祖母です。

私はその小さな茶色の本を閉じて、私が初め重要でないと思った聖句を読み返しました。主はこう言われています。「この市には、シオンのために汝らに与うる宝多くあり。……時至らばシオンの為にわが集めんとする多くの人々この市にあり。」(教義と聖約111:2)

予言者とほかの兄弟たちは、「金銀」を求めてサレムに行きました。しかし彼らの得た「宝」は改宗者でした。そしてその「宝」を通じて私自身の生涯と、共に育った兄弟、いとこ、そのほか数え切れないナサニエル・アシュビーの子孫はその生涯にこの上なく豊かな祝福を受けているのです。□

*キム・R・バーニンガム——ユタ州バウンテフル中央ステーク支部所属。

自分の 善良さを 計って みましょう



PHOTOGRAPHY BY PHILIP S. SHURTLIFF

ああなたは、良い友、良い兄弟姉妹、良い息子または良い娘ですか？ だれもがそうありたいと願っています。あなたが実際にどのくらい善良かを知るのに役立つちょっとしたテストがあります。それぞれの質問を自分に当てはめて考え、「はい」か「いいえ」で答えてください。

1. ほかの人の気持ちを思いやるようにしています。だれかが傷ついたり、気まずい思いをするようなことをわざと言ったりしません。

2. 秘密を守ります。皆の前でだれかに恥をかかせるようなことは、知っていても言いません。

3. 行なうと言ったことは必ず実行します。友達に対しても家族に対しても、約束したことは守ります。正直に什分の一を納めています。決められた時間にはめったに遅れません。

4. ほかの人の業績を自分の手柄にしたりしません。だれかがやり遂げたことや、自分のためにしてくれたことは、皆の前でほめます。

5. だれかと言い争ったら、後で自分のとった行動を反省します。もし自分の方が間違っていたら、それを認めて謝ります。

6. 非常に腹が立っていても、極端な言動は慎みます。たとえば、友達とけんかしても、「絶交する」などと言ったり、両親と意見が合わなくても「家出する」などと言ったりしません。兄弟げんかをして、「大嫌い」などと言いません。

7. だれかが失敗しても怒りません。ほかの人の短所を理解し、忍耐しようと心掛けます。

8. 自分が一番の物知りだとは思いません。進んでほかの人のところへ行き、素直に助けを求め、教を請います。そして祈りを通して天父に相談することも欠かしません。

さあ、「はい」はいくつありましたか。

7つ以上だった人は、上出来です。あなたは他人への思いやりがあります。皆はきっとあなたと一緒にいたいと思うことでしょう。

5つか6つならば、まあまあです。そして、「いいえ」と答えた事柄については、もう少し努力が必要です。

もし4つ以下でも、あきらめてはいけません。向上しようと意識的に努め、主の助けを求めらるなら、必ずこのような善良な特質を伸ばすことができます。□



PHOTOGRAPHY BY WILLIAM FLOYD HOLDMAN



イエスが 歩まれた地

第1部

イ エス・キリストがこの地上で行なわれたみ業は全人類に大きな影響を残しました。しかし、そのみ業は東西60キロから140キロ、南北240キロ足らずの狭い地域で行なわれたものでした。

イエスの教えられた福音は全人類に共通のものですが、イエスの教えや地上での体験は、その生まれ育った土地と密接な関係があります。羊、漁網、ひきうす、神殿の壁といったものが、主の生涯と教えの材料となり、また、取税人、羊飼、漁師、役人といった人々の中から、イエスの教えに耳を傾け、信じる人々が生まれました。

救い主が歩まれた地とは、どのような所だったのでしょうか。今月号では、イエスのお生まれになった場所や、み業を開始された場所の写真を紹介します。さらに来月号では、イエスの生涯や死と埋葬に関するおもだった史跡や場所を特集する予定です。

提供者の名前が掲載されていない写真はすべて、エルサレムのリチャード・クリーブ博士所蔵の写真資料です。



PHOTOGRAPHY BY TIMOTHY L. TAGGART

PHOTOGRAPHY BY WILLIAM FLOYD HOLDMAN



「神のパン」または「命のパン」(ヨハネ6:31-35)と呼ばれたお方は、ベツレヘム(写真左)でお生まれになりました。ベツレヘムとはヘブライ語で「パンの家」という意味です。

現在のベツレヘムの町は、「羊飼いの野」と呼ばれる岩の多い斜面のかなたに広がっています。この「羊飼いの野」では今なお、「カフィーヤ」(おもにアラブ人が頭に巻く布)を着けた羊飼いたちが、群れの番をしています。

ヘロデ王は、幼いキリストを殺害しようとしてしました(マタイ2:16参照)が、「主の使が夢でヨセフに現れて」

(マタイ2:13)、次のように言いました。「立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。」(マタイ2:13)

イエスがエジプトのどこで生活したのかはわかりませんが、写真(上)を見ると、砂漠地帯とナイル川で潤された豊かな土地との顕著な違いがわかります。ヨセフとその家族が逃れたのは、このような地でした。

しばらくエジプトにとどまったため、マタイが指摘しているように、ホセア書11章1節にある、神がその「子をエジプトから呼び出した」という予言が成就しました。(マタイ2:15参照)



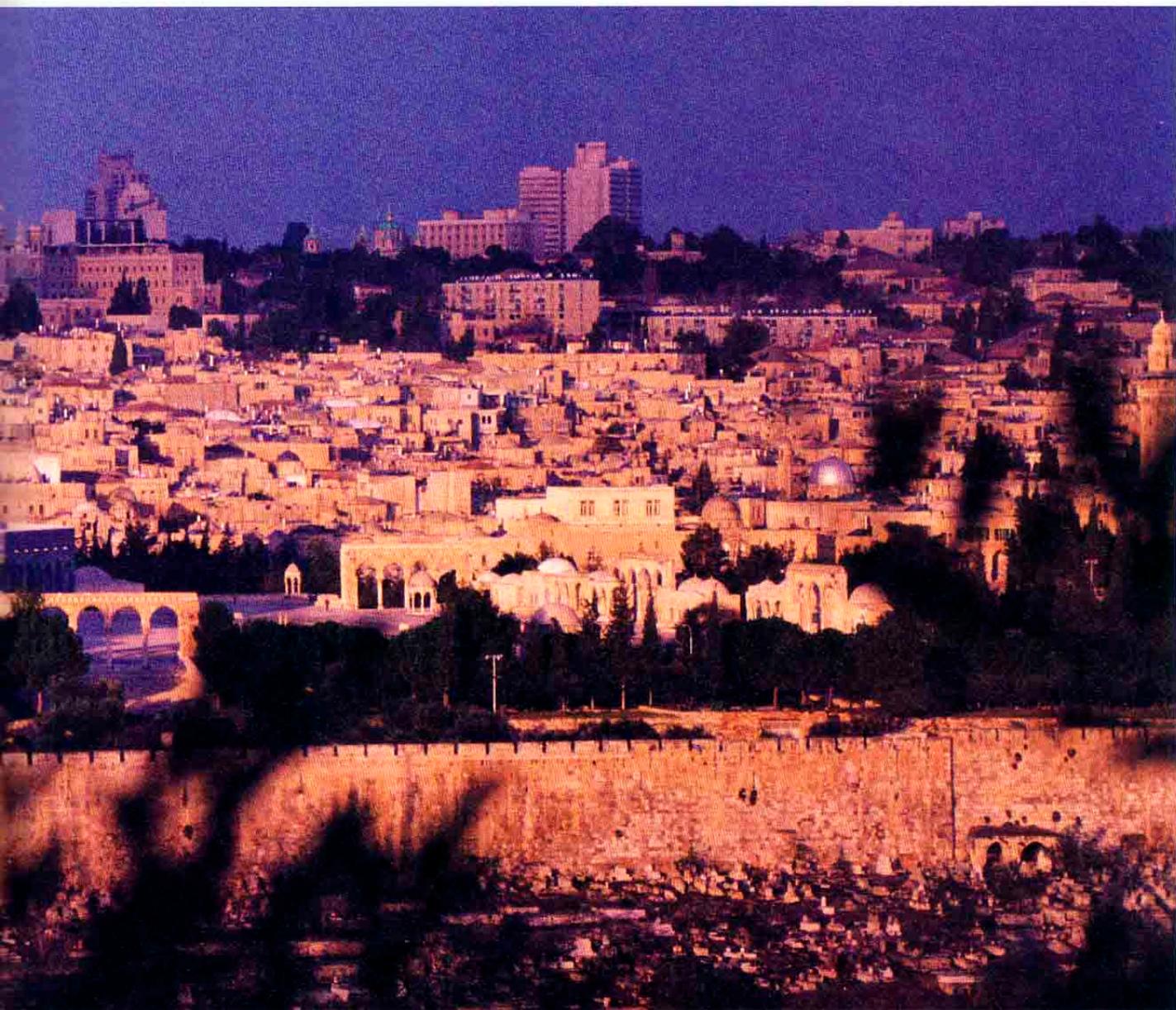
現在のエルサレムの神殿の丘(写真上)には、「岩のドーム」と呼ばれるイスラム教のモスクが建っています。最初に建てられたのは、紀元690年ごろです。昔ここは、ヘロデ神殿の敷地でした。救い主が降誕されたときにはすでに神殿は完成していましたが、救い主はこの神殿の敷地に次々と別の建物が建てられていく日を見通しておられたことでしょう。

現在のナザレの町(写真右)は、イエスとその家族と共にエジプトから帰って来て住まわれた当時に比べ、はるかに大きな町になっています。それでも、昔の町の面影

はかなり色濃く残っています。古びた市場や井戸は、キリストの時代にまでその歴史をさかのぼることができます。

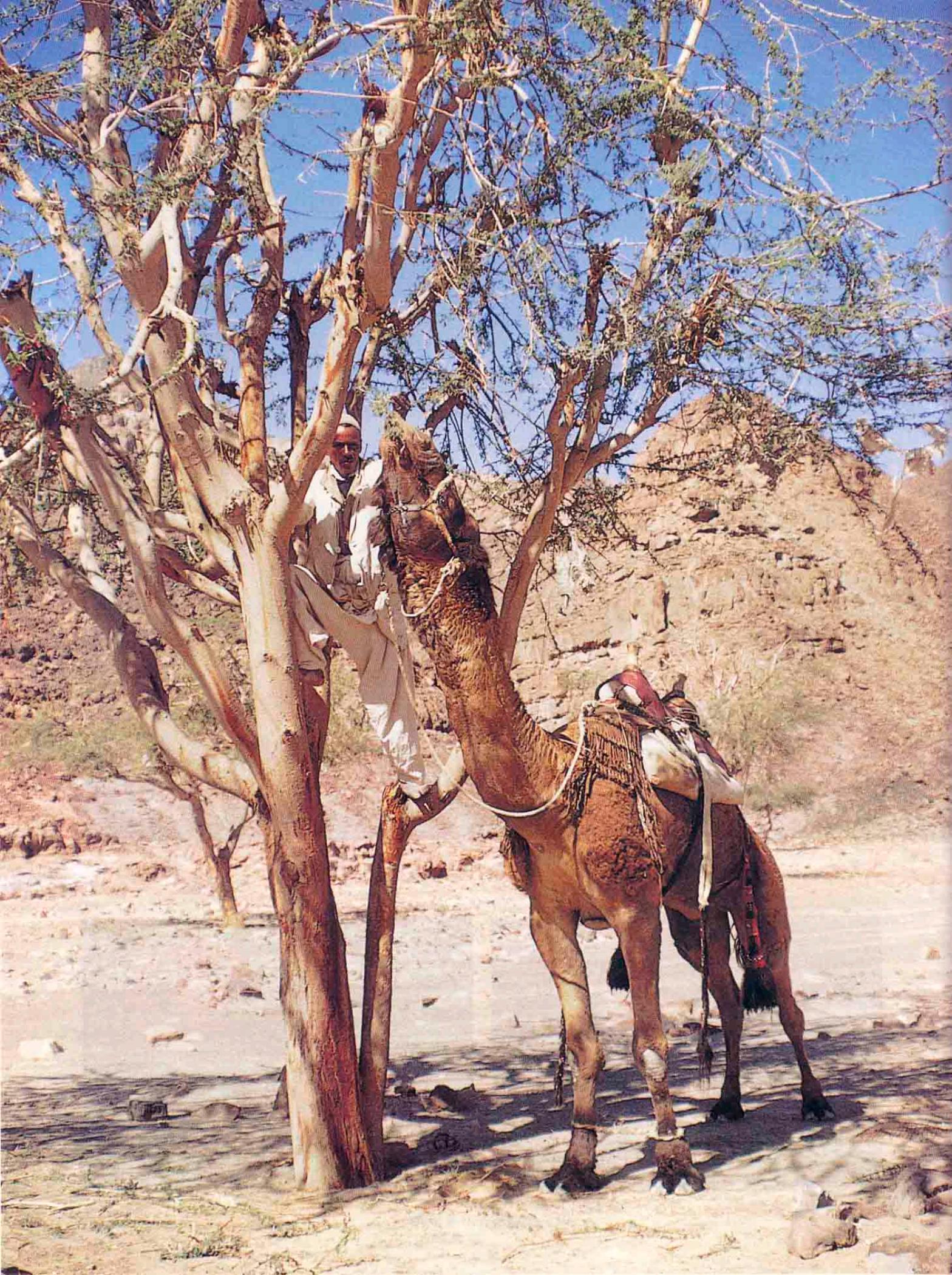
使徒ペテロは、「人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」(Iペテロ1:24)と語っています。

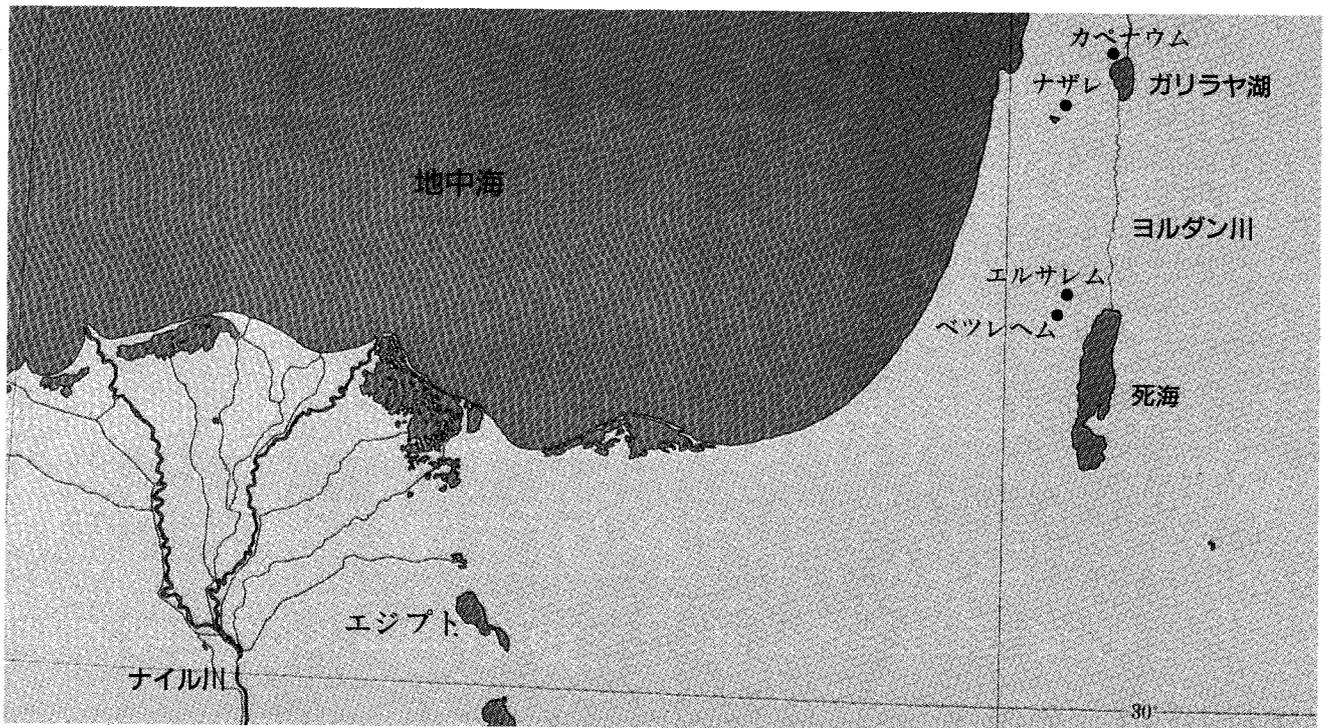
野生のけし(写真右端)は、聖書の時代でも現代でもありふれた花ですが、美しさがすぐに衰える短命の花の代表的なものでもあります。



PHOTOGRAPHY BY KATHLEEN E. LUBBECK







近代化の進む現代にあっても、今なおラクダは聖地で、聖書の時代とまったく同様に仕事や旅の手段として広く利用されています。バプテスマのヨハネもラクダについてよく知っていて、ラクダの毛で作った服を身にまっています。(マルコ1:6参照)また、救い主もよくご存じで、弟子たちにこう教えられています。「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい。」(マタイ19:24)またその後、救

い主は偽善的な律法学者やパリサイ人に向かって、「盲目的な案内者たちよ。あなたがたは、ぶよはこしているが、らくだはのみこんでいる」(マタイ23:24)と責められました。写真のラクダはアカシヤの木をかじっているところです。アカシヤの木は、モーセが主から命じられて幕屋を作ったときには、その幕屋や調度品の材料として使用されました。(出エジプト25:5, 10, 13, 23, 28参照)



イエスはみ業を始められたとき、カペナウムで生活しておられました。この町は、写真(右)の美しい場所から4キロほど南に下った、ヨルダン川上流部がガリラヤ湖に流れ込む場所にあります。イエスの時代には、カペナウムはパレスチナ全土で最も肥沃な土地で人口の密集した町のひとつでした。おそらく人口は1万人ほどであったものと思われます。おもな産業は漁業で、魚が次々に網にかかって引き上げられる光景は、当時も今も変わりありません。(写真上)カペナウムに住んでいたペテロとアンデレ、そしてヤコブとヨハネという2組の漁師の兄弟たちは、「人間をとる漁師」になりなさい、と言われた主の召しに従いました。イエスは、話を聞くために人が集まってくれば、どこでも教えを説かれました。ガリラヤ北部のケファー・バラムにあるこのような会堂(写真下)でも教えられました。この会堂は、紀元2世紀ごろに建てられたもので、当時の建築様式をよく今に伝えています。(裏表紙見返しも参照)□



「知恵の道」

ジル・ヘミング

大学1年生になりました。親元を離れ、自分で自由に選択できる生活がもたらしてくれた興奮は、想像を上回るものでした。キャンパスライフが授業以外にも様々な刺激に満ちていることを知るのに、いくらか時間を要しませんでした。大学生活のいろいろな楽しい活動に夢中になり、夜更かしをする晩が幾日も続きました。

土曜日の晩は特に問題でした。翌日に授業がないのをいいことに、だれもが羽目を外していました。それまで教会のどの集会にも出席していた私が、ときどき教会を休むようになりました。日曜日の朝9時から始まる集会に出席しようとしても、睡眠不足がたたって、思うようにベッドから起きられないのです。ある朝など、ぐったりした体を引きずって教会に足を踏み入れたものの——もちろん遅刻していましたが——、堅い木のいすの上でもいいから、思いつき手足を伸ばして横になりたいと思いました。

集会から得るところなど、あろうはずもありません。ある日曜日、ついに2週続けて教会を休んでしまったことに気付いたのです。良心のとがめを感じました。旧約聖書を読み始めたのは、多分そのためでしょう。教会の集会に出られなくても、自分で少なくとも何かは学べるだろうと思ったのです。

旧約聖書を読み進んでいくと、以前読んで印を付けておいた聖句が目にとまりました。その言葉に心が揺さぶ

られるような気がしました。

「わたしは知恵の道をあなたに教え、正しい道筋にあなたを導いた。……教訓をかたくとらえ〔よ、〕……それはあなたの命である。よこしまな者の道に、はいつてはならない、悪しき者の道を歩んではならない。」(箴言4:11, 13-14)

あたかも天父が私に向けて、「もっと分別を持ちなさい」と言っておられるようでした。愛ある両親、教師、指導者はいつも私に「知恵の道」を教えてくださいました。私は「正しい道」に導かれていたのです。正しいこと、つまり安息日を覚えてこれを聖とするにはどうすればよいか、わきまえるだけの理解力を身に付けていてしかるべきでした。

大学に入って初めて、自分の霊性に対してどれだけ大きな責任があるのかを悟りました。「悪しき者の道」に迷い込まないようにする責任は、親やほかの大人にあるわけではありません。自分自身の責任なのです。

今でも、ときどき夜更かしをしたくなります。以前は安息日の備えを完全にするために、もっと自分にできることがあるだろうと感じていました。しかしあの聖句との出会い以来、日曜日をすっきりした気持ちで過ごしたいと思うなら、土曜日の晩に十分な睡眠を取った方がよいとわかりました。今ではそれが私のひとつの生活目標になっています。□



ルイス・アルベルト・フェリーソ ——地区代表

ネストール・クルベロ

主は末日の教会員に、一般社会の指導者を慎重に選ぶように勧めておられます。「この故に、汝ら正直なる人々と賢き人々を熱心に探し求めよ。また、汝ら善き人々と賢き人々とに従いてその力となるべし。」(教義と聖約98:10)地域社会に参加し、国の法律を擁護する善良な人々を選ぶようにと、主の予言者は聖徒たちに絶えず勧告しています。

ウルグアイ、フロレスの地区代表、ルイス・アルベルト・フェリーソ長老は、賢い指導者を立てることがいかに重要であるかを知っています。彼は長年、地方や国の政治にかかわってきました。今やフロレスの住民は、賢明な指導者として彼に期待を寄せています。最近行なわれたウルグアイの選挙で、フェリーソ長老はフロレス地区を代表する上院議員として選ばれました。

50歳のフェリーソ長老はフロレスで生まれ育ち、妻のフリーダ姉妹との間には、ふたりの子供エベリーネとルイス・アルベルト Jr. がいます。彼は地元の実業家、地域の活動家、そして教会指導者として、政治理念を同じくする人のみならず、ほかの政党の人々からも愛と尊敬を勝ち得ています。教会の地区代表であり、国会議員で

もある彼は、政治も福音も領域は違うものの、それぞれが大切であると知っています。

彼はこう語ります。「政党活動と教会活動は別個のもので、教会は政治には関与せず、中立の立場にあります。私たちは教会の集会で、支持政党や個人的な政治活動の話はせず、福音のことだけを話します。しかしながら教会員は善き市民として義務を果たしなさいとも教えられています。」

ウルグアイは昔から政治や宗教の自由な国でした。歴史の初めから教会と国家が分離していたのです。末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師が1947年に到着し、教会は1950年代に緩やかながら着実に成長しました。1960年代にはこの国で最も強力に活発な教会のひとつとなり、現在の教会員数は、人口330万人のうち5万人以上を数えています。

ウルグアイで教会が社会によく知られるようになるにつけ、フェリーソ長老をはじめとする指導者の業績は、教会の活動や目的に関する誤った情報の障壁を崩すのに役立ちました。彼らは模範を通して、教会の発展や福音のメッセージを広めるのに貢献したのです。



フェリーソ夫妻と子供たち ルイス・アルベルト Jr.
(左)とエベリーネ(右)



「私の信条や信仰生活に対する同僚たちの見方は尊敬というか、一種の称賛とも言えると思います。地域の大勢の人が、教会員に公職は勤まらないと思込んでいるので、私が政治家となったことは非常に好意的なイメージをもたらしたようです。これまで地域活動や政治活動をしていて、イエス・キリストの教会の会員であることが障害になったことは一度もありませんでした。かえって、原則を守っていることで尊敬されてきました」と、フェリーソ長老は言います。

フェリーソ長老は1966年に党の議員のひとりとして地域活動を始めました。1971年にはフロレス県議会議員、1985年には下院議員に選ばれ、またフロレス市長補佐役の候補ともなりました。そしてさらに1989年には上院議員に選ばれたのです。活動は地域以外にも及んでいます。スポーツ面では地元のスポーツ委員会で働き、15年間ペンニャロール・サッカークラブの会長を務めました。また、教育面では、子供の通う学校のPTAで最初は書記として、続いて会長として働きました。職業面では競売事業を営んでいます。

教会活動でも活躍してきました。フェリーソ長老は1963年にバプテスマを受け、1967年にはフロレス支部の支部長に召されました。その後、9年間はブラスノ地方部の地方部長、さらに9年間をブラスノステーキ部のステーキ部長として働きました。そして1989年からは地区代表として働いています。

議員として、毎日の決定に福音の教えが反映されるように努めていると、フェリーソ長老は語ります。「福音の原則を曲げかねない議題が上ったときには、たとえ、最終決定はいつも党則によるとしても、私は福音の原則

に添って考え、それを擁護しています。」

フェリーソ長老は様々な活動に関心を寄せていますが、一番心を向けているのはやはりイエス・キリストの福音です。福音によって、物事をいつも広い視野から見通すことができるのです。

「天父の目的は、私たちに永遠の生命を得させることにあります。私たちはそのために、福音の原則を学び、戒めを守り、体力も知力も社会性も伸ばしていかなければなりません。この世の学問もしっかりと修める必要があります。しかし、福音がその基盤になっていなければなりません。」

フェリーソ長老は教会員、とりわけ青少年に、将来幸せで豊かな生活ができるように、今、準備することを勧めています。「伝道と神殿結婚は若人にとって大切なステップです。そうすることにより、自己の生活を確立し、様々な形で社会に寄与できるようになります。そして人々は、福音の原則が彼らの生活をどのように左右するかだけでなく、どんな実を結ぶかをも目にすることでしょう。模範によって、彼らは福音を広める力となるのです。」

政府と法律に関する教会の信条が、教義と聖約の中に述べられています。「われらは信ず、すべての人はその固有不動産の権利を政府の法律によりて保護せらる間その属する各自の政府を支持し擁護すべき義務あり。」(教義と聖約134：5)

ウルグアイの人々のために日夜働いているフェリーソ長老は、この聖句の教えの大切さを確信して次のように語っています。「良い指導者を選べるように、その準備として、自分の国の政治について知っておくのは、教会員の義務です。」□

*ネストール・クルベロ兄弟——アルゼンチン、ブエノスアイレス北ステーキ部ステーキ部長、教会教育部職員。



カヘナウム

この航空写真は、カリラヤ北部に残る古代都市の遺跡の一部である。イエスはみ業を始められた初期のころ、この地に住んでおられた。イエスは様々な奇跡をここで行なわれたが、人々がイエスを拒んだため、後に主は彼らを叱責された。(マタイ 8 : 5, 14 : 9 : 1 ; 11 : 23 ; ルカ 4 : 31—35, 38 : 5 : 18 ; 7 : 1 ; 10 : 15 ; マルコ 1 : 21, 30 ; 2 : 1 参照)



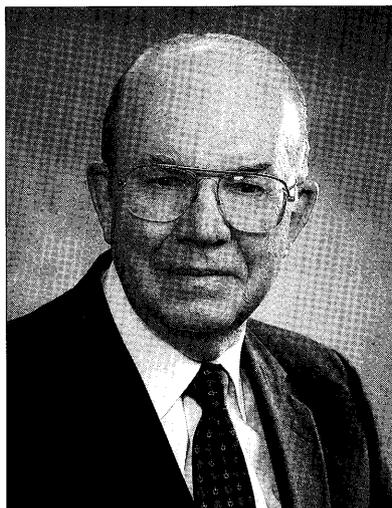
「**教**会では自立するように教えられています。」フィリピンのポール・F・ブノアン兄弟はそう語る。夫婦宣教師のリグラント・ラーセン長老とベティー姉妹は、ミンダナオの会員たちが藤かご細工で生計を立てられるように手助けしている。今月号「フィリピンの聖徒たち 信仰の民」p. 8 参照。

日本における 教会の発展

アジア地域会長会会長
マーリン・R・リバート

十二使徒であったヒーバー・J・グラント長老は、1901年9月1日、福音を教え広める地として日本を奉獻しました。今年、その90周年を迎えられることを、日本の聖徒の皆さんと共に喜びたいと思います。日本の教会歴史はまさに1世紀を経過しようとしています。ここで、その推移の過程を細かに紹介できる紙幅はありませんが、初期の出来事の数々は読者の皆さんの興味を大いにそそるでしょう。

ロレンゾ・スノー大管長は、日本の著名人何人かの招きを受け、いくつかの好ましい兆しもあったため、1901年初頭、日本に伝道部を開設することを、十二使徒評議員会と共に決定しました。当時十二使徒評議員会の一員であったヒーバー・J・グラント長老がこの責任を引き受けることになりました。前途に横たわる任務がいかなるものか想像もできませんでしたが、グラント長老はみ業を果たすための補佐役に3人の同僚を選びました。まず、合衆国、イギリス、ドイツで十分な伝道経験を積んだルイズ・A・ケルチ長老。そして、伝道の経験があり、一時はグラント長老の私設秘書を務めたこともあるホラス・S・エンサイン長老。エンサイン長老は、熟達した音楽家であり、声楽家としても相当の技量を持ち、タバナクル合唱団の副指揮者の地位にありました。最後に、当時18歳の青年だった、アルマ・O・テイラー長老。彼

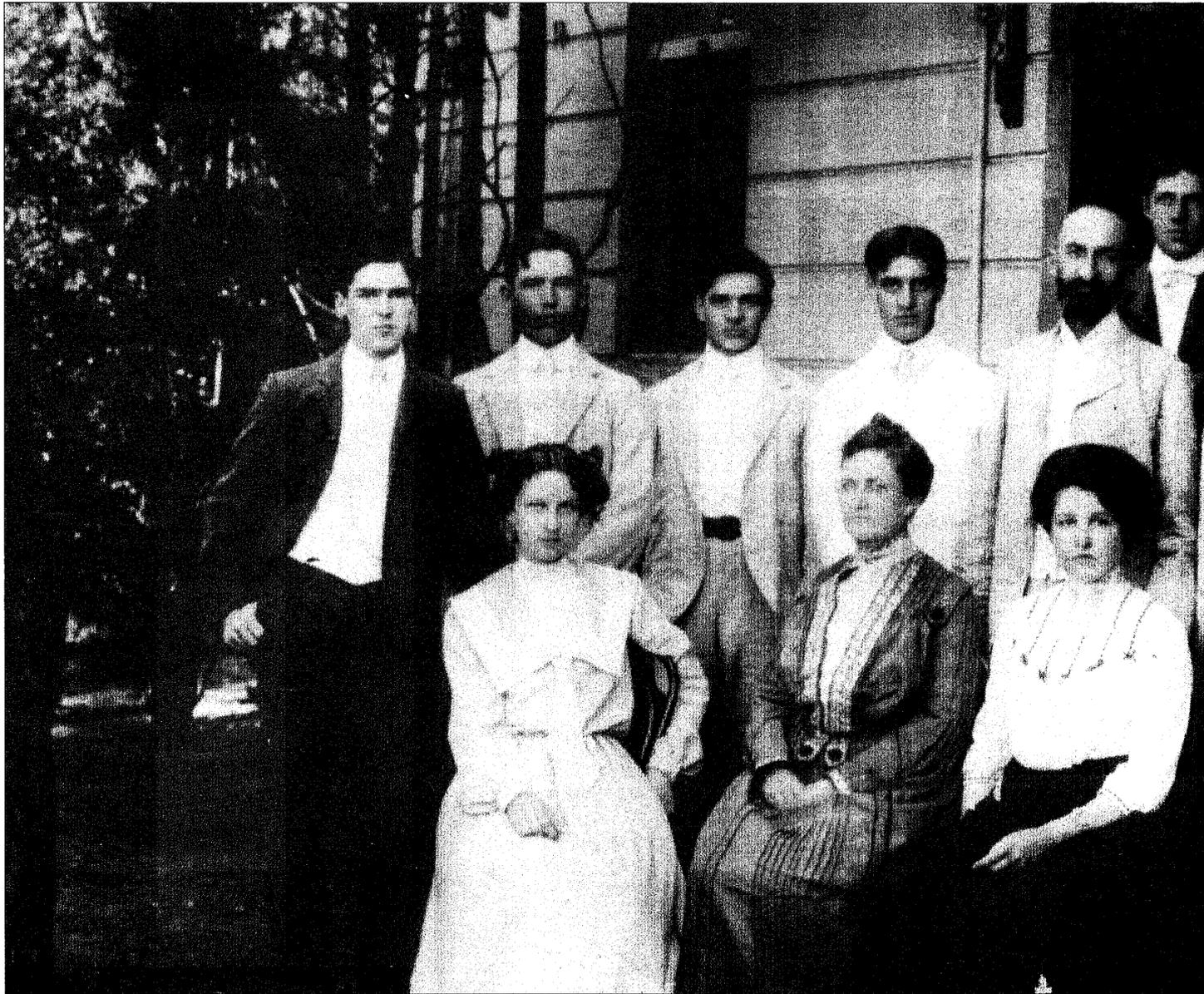


は1910年に故国に帰還するまで、9年以上の歳月を宣教師として日本で働くことになりました。

グラント長老を指導者と仰ぐこの宣教師の一行は、1901年7月24日、ソルトレークシティを後にしました。ちょうどこの日は、モルモン開拓団の本隊がソルトレーク盆地に到着してから54回目の記念日にも当たっていました。その日、グラント長老をはじめとする宣教師たちは、新しい違った意味での開拓事業に着手したのでした。一行はバンクーバーまでの道のりを旅して、7月30日にそこからイギリス船「エンプレス・オブ・インディア号」に乗り込み、同年8月12日、東京湾に到着します。ところが宿泊すべき宿さえ容易に見付かりません。おもにほかのキリ

スト教各派があおりたた「モルモン教の宣教師」たちに対する悪感情のためでした。来日した日の晩、エンサイン長老は、夕食をとる宿泊客たちの前で歌を歌い、宿泊客たちの心にある悪い印象を払拭することに努めたほどです。後年の記録資料によれば、日本の偉大な政治家のひとり、伊藤博文侯はかつて合衆国を広く見聞し、教会やその指導者との間にある程度の親しい関係があったようです。グラント長老とその一行が日本に到着すると、博文侯は政府として公式の歓迎会を行なうように提案しました。日本の伝統的な宗教界の指導者たちはこの提案を受け入れたのですが、キリスト教界の指導者たちがこれに反対しました。博文侯はこうした反対の気運に押されて提案を取り下げてしまいました。一行が日本に着くと、当時の新聞各紙はこぞってこのモルモン教の宣教師の記事を載せました。しかし大方は多妻結婚の問題を採り上げ、教会に不利な論調でした。それらはアメリカの場合と同じように、日本でも極端にゆがめられた報道内容になっていました。

長老たちは最初、横浜に居を構えましたが、1カ月後、活動の拠点を東京に移しました。グラント長老は著名人たちからの紹介状を何通か携えていましたが、彼らは大体において親切であっても、「新興宗教」には関心のない人々でした。



伝道ははかばかしく進みません。一番大きな原因はだれも日本語が話せなかったことにあります。しかし、主はエンサイン長老とテイラー長老に日本語を教えてくれる友人を何人か備えられました。5カ月後、テイラー長老は片言ながらも自分の証を日本語で伝えられるようになりました。しかも彼は、続けてすぐれた語学力を発揮し、ついにはその後何年かの間に、モルモン経の日本語版初訳にかなり貢献ができるまでになります。

ケルチ長老は1年以上日本に滞在してから、故国に帰還します。グラント長老は1902年4月の総大会のためソルトレークシティに一時戻り、翌年の9月にはこの責任から解任されます。

伝道地に赴任してから、約2年後のことでした。代わってエンサイン長老が伝道の責任者となります。グラント長老がバプテスマを施したのはわずかふたりだけでしたが、ふたりとも信仰を保たなかったために、グラント長老は伝道は何の实りも得られなかったと感じて帰国しました。しかし、グラント長老はそうした手探りの日々の中で伝道のみ業を見守り、それが新たな時代の幕開けとなったのでした。

4人の宣教師の一行は横浜にいる間、市の南部に位置する「外人住宅街と入江との間にはさまれた」丘の上の、あらかじめ決めておいた森の中に入り、1901年9月1日、グラント長老が福音を宣べ伝える地として日本を奉獻しま

した。テイラー長老はこの歴史的な出来事を次のように記しています。

「彼の舌は緩められ、みたまが豊かに宿った。みたまの力があまりにも強かったために、彼の口から言葉が出るたびに私たちの心は内に燃え、神のみ使いたちが近くにいるのを感じたほどだった。私は今までにこのような平安な気持ちを経験したり、このような力強い祈りを聞いたことはなかった。その言葉の一つ一つが私の骨にまでしみとおり、喜びの涙にむせるほどだった。」(マレー・L・ニコルズ「末日聖徒イエス・キリスト教会日本伝道部史 1901—1924年」1957年11月, p. 25)

最初の教会の集会は1903年4月18日に、神田のある広いホールで行なわれ

グラント長老家族と宣教師たち (1902年撮影)



ました。テイラー長老は日本語で話をしました。日本で福音を広めるための最大の障害は、やはり言葉が通じないことと、福音のメッセージを日本語で紹介できないことでした。それでも最初の賛美歌集が1905年5月29日に印刷に付されました。この中には66曲が収められていましたが、楽譜には主旋律しか記されていませんでした。後にいくつかの改訂が行なわれましたが、1916年になって初めて、末日聖徒が使用する英文の標準の賛美歌集から220曲を集めて、賛美歌集が日本で刊行されました。

1904年から1909年までの間に、特定のテーマ別に福音の原則のパンフレットが作成、翻訳され、訂正を加えて出

版されました。しかし、だれもが完成の必要性を痛感していたのはモルモン経の翻訳でした。テイラー長老はこの事業を監督するという重要な仕事に就いていました。彼は自分の日本語力の限界を感じながらも、1904年1月11日に翻訳に着手しました。また、1905年7月14日には、その若さにもかかわらず、伝道部長にも任命されました。この翻訳作業の後半に入るまで、テイラー長老は信頼できる日本語の翻訳者の助けが受けられなかったため、非常な困難の中で翻訳作業は進んでいきました。1909年6月10日の日記の中に彼はこう記しています。

「私は最後の参照聖句の翻訳を書き終えました。私はホッと深くため息をつきました。それは大きな仕事を完成したときに自然に出てくるため息でした。そして私の胸は言葉には言い表わせない感謝と喜びに満ちました。」

続く1、2カ月の間に若干の訂正を加え、1909年10月6日、製本された初版の2部を日本政府に納本しました。テイラー長老の行なった仕事は膨大なものでした。補助者、筆者、校正者、印刷、出版、広告などに要した費用の総額は、最初に発注したモルモン経5,000部を含め、当時の金額で3,190ドル56セント、すなわち63万8,112円でした。

伝道部が開設されてから、1924年に閉鎖されるまでの間に、バプテスマの数は166件、うち男性109人、女性57人でした。9年以上も宣教師として日本にとどまり、その間に1度も帰国しなかったテイラー長老も、1910年1月1日に解任されました。

1920年12月、当時十二使徒であったデビッド・O・マッケイ長老は伝道部の必要を見極めるために日本を視察して回りました。宣教師が不足していることがマッケイ長老の目には明らかで

したが、彼は日本人と伝道部に対する温かい気持ちを感じて帰国の途に就きました。マッケイ長老の訪問の後、伝道活動がさらに活発になり、1922年には過去10年間に売れたモルモン経と同数のモルモン経が1年間で売れるという勢いを示しました。宣教師も増員されました。

ところがこの間に、国際間の緊張は高まり、日米両国の間に双方の行為がもとで誤解と悪感情が生まれました。それらは教会にも会員たちにもどうすることもできない問題となりました。アメリカで生活する東洋人への差別は合衆国の一部地域では日常化し、日本人の心に敵意と復讐心を引き起こすことになりました。1924年6月27日、当時は教会の大管長となっていたヒーバー・J・グラント長老の命により、すべての宣教師は「一時的に」撤退を余儀なくされたのでした。

この期間、ハワイの人口の約半数が日本人または日本人を先祖に持つ日系人だったこともあり、日本人の間で始まった伝道のみ業は、このハワイの地で続けられ、1937年の初め、ホノルルに本部を置いて、日本伝道部が再開の運びとなりました。第二次世界大戦後、かつてハワイの日本人聖徒たちの間で働き、1945年には占領軍の一員として日本に従軍した、エドワード・L・クリソルド兄弟が、1947年10月に日本伝道部の伝道部長に任命されました。政府から日本への入国許可を得て、クリソルド伝道部長は1948年3月に東京に着き、ここにおいて伝道部が再開されることとなります。

1948年を境に、日本における教会員の数は新たな勢いで増加します。1955年までに、日本伝道部は分割されました。現在では、伝道部が10、ステーク部が22、地方部17、会員総数は9万9,484人(編注——1991年6月末現在)

を数えるに至っています。おそらく何万人と集う忠実な教会員たちの精神をはっきりと示す最もすばらしい出来事は、壮麗な東京神殿が建設、献堂されたことでしょう。東京神殿は1980年10月の27日から29日に、スペンサー・W・キンボール大管長によって奉獻されました。今日神殿は、忠実な教会員たちがイスラエルの神に捧げる忠誠と信仰の記念として、また、すべての日本人に対する真理と義の旗じるしとして建てられています。

主はこの美しい地に対して、過去40年の間大いなる祝福を与えてくれました。戦争の焼け跡の中から日本は復興し、今日のように力ある国になりました。諸国との間に残っていた苦々しい憎しみの念も、大方は相互信頼と依存の関係に場所を譲っています。主がこの国を祝福するにふさわしいとお考えになったのは、自由にも完全に宣教師たちとの交流が許され、民の間に教会の設立が認められたからであると、私は考え、信じています。相互理解と助け合いを通じて、教会員たちの間には愛と感謝の強いきずなが育っています。それらは海を越えて、末日聖徒たちをひとつに結び付けているのです。

日本の総人口から見れば末日聖徒の数はまだほんの少数ですが、それにもかかわらず、忠実な教会員たちは善に対する強い影響力を発揮するでしょう。正しい生活を送るすべての教会員は、社会全体に対して、正義のパン種の役割を果たしているのです。主は末日聖徒が福音の原則を実践し、教え、この日本の地で、日本人の神権者の手から、日本語ですべての救いの儀式を受けられるように、この国を祝福し、守っておられます。それが栄えある神聖な祝福なのです。

そのように偉大な祝福が日本の国民、

特にこの教会の会員たちに与えられていると同時に、義務も課せられています。教会員は福音の諸原則を完全に実践するという誓約を交わしています。そうした義務の中に、伝道のみ業に携わり支援することによって、同国人たちに福音を伝えるという義務があります。主の予言者はすべての若い男性に、自らを備え、伝道に出るという責任を与えています。これは私自身の考えですが、「門を守る者」であり、「ここには下僕をお使いにならない」(II ニューファイ 9:41) 主にお会いしたとき、今のところ伝道できずにいる大勢の人々にはもっともと思われる言い訳を述べたところで、はたして平安を感じていられるでしょうか。アルマ・O・テイラー長老はその青年時代の初期に、日本に最初にやって来たあの4人の宣教師の中のひとりとなりましたが、ユタ州の故郷に戻るまで9年以上の歳月を宣教師として働いたのです。家族や本人の犠牲がどれだけあったかは容易に察することができます。これと比較すれば、主が現代の教会の若い男性に求めておられる犠牲は、わずかなものです。

1830年に教会が組織されて以来、現在までに50万人以上の宣教師が伝道に出ました。一人一人の伝道期間を合計すれば、100万年分に相当します。1924年に日本伝道部が閉鎖されたときには、テイラー長老の心は悲しみで閉ざされたに違いありません。しかし、彼の有能な働きによって基礎が据えられ、その上に開花する現在の成功を予見できていたら、疑いもなくテイラー長老の心は喜びで満たされたでしょう。

会員歴の長さにかかわらず、私たちは皆、だれか周りの人々の伝道活動のおかげで教会員になったのです。自分以外のだれかが、伝道活動と取り組むために信仰を持ち、進んで自分の金

銭、時間、果ては将来得られるはずのこの世の富や地位までなげうってくれたおかげで、私たちは教会員になれたのです。宣教師が伝道を始めるときに心の中に持っている唯一の確信といえれば、もし進んで自分を捨てるなら、つまり自分の個人的な望みや、キリストの教えを広めるために福音を伝える務めを妨げるいかなることも後回しにするなら、主が支え、祝福して下さる、というものなのです。

私たちは熱心に努めて、90年前にこの「日の出ずる国」でささやかに始まったみ業を推し進めようではありませんか。日本は皆さんの住む地であり、皆さんの先祖が住んだ土地、高貴にして悠久の歴史を持つ偉大な民が住む国土なのです。主は大きな祝福を日本に注いでおられます。聖徒たちがこれからも正しい生活を送り、召しを全力を尽くして果たし、主に仕えるために思いと勢力と力を尽くして働き、十字架を負ってわれに従えという救い主の招きに心を向けていくなれば、ときには打ち勝ち難く見える障害に出合っても、主は聖徒たちがみ業を成功させられるように常に祝福して下さるでしょう。しかも自分を忘れて主のためにのみ業に打ち込むならば、この世では新たな生活が開け、来世においては永遠の生命が得られるでしょう。

注記——この記事の中で引用した歴史上の事実は、おもに「末日聖徒イエス・キリスト教会日本伝道部史1901—1924年」によるものである。これは、1957年11月、ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学歴史学部へ提出するために作成されたマレー・L・ニコルズ兄弟の修士論文である。ニコルズ兄弟自身、かつて日本で宣教師として働いた経験を持つ。

島袋元神殿長、 教会幹部に召される

大 管長会は、ハワイ州ホノルル出身のサム・K・島袋長老を七十人第二定員会会員に召した。

日系ハワイ人の島袋長老(66歳)は、ハワイ大学から行政学の学位を取得し、ハワイ州労働局を退任している。

この新幹部は最近までホノルル西ステーク部ステーク部長の職にあった。青年時代に北部極東伝道部で専任宣教

師として働き、後に、監督、高等評議員を務めた。1981年から84年までは日本仙台伝道部の伝道部長、1985年から88年までは東京神殿の神殿長としても責任を果たした。

島袋長老と妻のエイミー・道子・広瀬(旧姓)姉妹の間には娘がひとりいたが、亡くなっている。



教会を受け入れるソビエト

ロシア共和国，教会を公式認可
アルメニア共和国，集会所の建設用地を提供

➤ のたび教会は、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国において正式な認可を受けた。

これにより教会は、必要に応じてロシア共和国のどの地域でも集会所を開くことができるようになった。(レニングラード支部は、すでに1990年9月にソビエト連邦宗教評議会から正式な認可を受けている)

ソビエト連邦中最大の共和国の副大統領アレクサンドル・ルツコイ氏は、名高いポリショイ劇場で行なわれたモルモンタバナクル合唱団のコンサートの後、晩餐会ばんさんの席上で、教会に正式な認可が下りたことを発表した。

同合唱団は、ソビエト連邦のモスクワとレニングラードでのコンサートをはじめ、ドイツ、フランス、スイス、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランドで、歴史に残る

ヨーロッパ公演旅行を果たした。同合唱団が東欧諸国およびソ連で公演を行なったのは今回が初めてである。

さらに同日、教会はアルメニア・ソビエト社会主義共和国より教会建物のための敷地を提供された。この土地は、アルメニア共和国の首都エレバン市にあり、アルメニア共和国建設大臣から提供され、教会を代表して十二使徒評議員会のラッセル・M・ネルソン長老とダリン・H・オークス長老、七十人第一定員会会員であり、ヨーロッパ地域会長会会長のハンス・B・リンガー長老がこれを受けた。

この土地には、末日聖徒の礼拝堂ならびに宿泊所として利用できる、多目的建築物が建てられる。ハンツマン化学工業とアルメニア政府の共同経営による工場には末日聖徒がいて、ここで働く末日聖徒の奉仕者たちが宿泊所を

使用する。総工費250万ドルのこの工場では高品質のコンクリートパネルが製造され、それらのパネルは1988年のアルメニア地震災害で失われた住居に代わる、約6,500戸の共同住宅の建設に用いられる。

ハンツマン化学工業はユタ州ソルトレークシティーに本部を置き、ジョン・M・ハンツマン氏が経営する会社である。ハンツマン兄弟は活発な末日聖徒であり、アルメニア共和国との関係は、先の大地震があった際、医療救援物資を送ったことに始まる。

敷地の提供を受諾するに当たり、ネルソン長老はアルメニアの人々に感謝の意を述べるとともに、「この敷地に建つ建物を用いて、天父の愛と同胞への兄弟愛とを宣べ伝えていく」ことを約束した。

兄弟げんかを防ぐには



我が家の3人の娘のうち、ふたりは年齢がそれほど離れていません。子供たちの対抗意識を和らげるために、次のような工夫が役立っています。

- どの子供にも互いの良い点を強調する。姉が手伝おうとしたら、「こんなふうには手伝ってくれるお姉さんがいてよかったじゃない」と妹に言葉を掛けます。ちょっとした言葉も長い目で見ると、良い関係を築くのに役立ちます。
- それぞれの子供に自尊心を持たせる。自分自身に満足している子供は、あまり対抗意識を感じません。
- お互いの生活や務めにかかわりを持たせる。姉に妹の宿題を見させたり、親が外出したときの留守番を妹の方にさせたり、何らかの仕事の仕方を互いに教え合わせたりします。こうして、

互いの成功に役立てるようにするので

す。
●口げんかをやめさせるために冷却期間を置く。子供同士が口げんかを始めたなら、しばらく自分の部屋へ行かせます。いくらもたたないうちに、子供は自分で穏やかな解決方法を思い付きます。親もどちらがいい悪いと決める必要はありません。

●夫婦がまず愛のある穏やかな関係の模範を示す。子供は親が気付く以上に細かな点まで親の姿をまねているものです。

ユタ州シーダーシティー
アーラン・アンダーソン

■比較しない

●比較しない。「どうしてスージーのように清潔にしないの」とか「デビッ

ドはもっと賢いわよ」などという言葉は禁句です。人と比較されて育った子供に兄弟愛は育ちにくいものです。比較の対象にされた子供も人を見下すようになるかもしれません。

●それぞれの子供に「特別な入れ物」を与える。箱でも引き出しでもよいのですが、その中には、自分だけが使うおもちゃや思い出の品を入れます。本人の許可なしにはだれも中の物に触ってはいけません。そのほかのおもちゃはだれが使っても自由であることを説明します。この方法は、取り合いのけんかをやめさせるのに不思議なくらい効果があります。

●子供同士で助け合えるようにする。子供に、靴ひもを結ばせる、あるいは赤ちゃんに哺乳瓶ほにゅうびんを与えるなどの雑用を手伝わせ、兄弟同士で互いに助け

合う機会を与えます。適切な方法を探れば、こうした助け合いの中で兄弟同士の愛情が育つはずです。

カリフォルニア州
ローリー・L・デニング

■赤ちゃんを「与える」

我が家で見付けた兄弟げんかを防ぐひとつの方法は、赤ちゃんを年上の子供たちに「与える」ことでした。もちろん赤ちゃんを抱いたり、一緒に遊んだりする時期や方法については制限を設けますが、それでも子供たちに赤ちゃんを完全に預けてしまうのです。無条件で慕ってくる相手が自分のものなのに、なおしつと感じるということはあまりありません。我が家のまん中のふたりなどは、出会った人がうちの赤ちゃんについて何も言わなければ、侮辱を感じてこんなことまで言います。「ママ、あの人は、うちの赤ちゃんをかわいって、言わなかったね。」
ユタ州イーストカーボン
コニー・マッコート

■公平に愛を示す

十分な愛情を示せば、兄弟げんかの頻度も少なくなります。幼いうちに次の事柄を始めてください。

- 子供一人一人の特別な才能やそれぞれの特質に気を付け、心を配る。どの子供も独自の才能をより豊かに伸ばせるように励ましがが必要です。できるだけ手を差し伸べられるようにしておくことは大切ですが、子供が自分の体験によって成長できるように助けてください。
- 人は皆神から授かった、それぞれに異なる使命を持っていることを子供に教える。神は私たちすべてを異なって創造し、それぞれに違う問題や選択の機会を与えられたのです。
- 親にとっても神にとっても、一人一人が平等に貴く大切な存在であることを、子供たちに教える。
- 人によって必要とするものが違う理由と、それでもすべての人は平等に愛されている、ということをお子に説明する。

アリゾナ州メサ
コニー・B・スチーブンス

■「今週の主役」

我が家のけんかのほとんどは、何かを分けたり最初にいいものを選んだりするときに起きます。そこで、子供たちが順番に特別待遇が受けられる案を考え出しました。名付けて「今週の主役」。

最初の週は、まず長女が「今週の主役」になります。2番目の娘はその次に特別待遇を受けられるようにします。こうして最後の5番目の子供まで待遇に順位をつけ、その週は、たとえば車の中で最初に自分の好きな席を選べるのは「今週の主役」とします。また、最初におやつを選んだり、両親と買い物に行ったりするのも「今週の主役」とします。そして2番目の子供は、2番目に選択権が行使できるという具合です。

次の週は、前の週の「今週の主役」が最後の順位に移り、ひとりずつ繰り上がって、順番に全員が「今週の主役」になります。我が家では6年前からこの方法を実行していて、子供が3歳になるとこれに参加させています。面白くて実用的なだけでなく、実際に効果も上がっています。

カリフォルニア州リバーサイド
ジェフ・マイヤーズ、ダラス・マイヤーズ

■けんかの芽を早期に摘み取る

けんかは起きる前にその芽を摘み取るのが肝要です。赤ちゃんが誕生したら、次の指針に従って兄弟間に良い関係を作ってください。

- 赤ちゃんと上の子が同時に構ってもらいたがる時は、まず上の子の方をみるようにします。生まれたばかりの赤ちゃんは待たされても覚えていませんが、大きい子はそうではありません。
- 訪問客が赤ちゃんをほめ始めたら、その人に赤ちゃんを抱かせてあげます。その間にほかの子供たちに注意を向けます。上の子は母親と大切な接触の機会が持てるので、かえって来客を楽しみにします。
- 「赤ちゃんがいるからあなたの頼みは聞けない」とは絶対に言うてはなりません。「赤ちゃんが眠ってるから、散歩はだめよ」と言わずに、「赤ちゃ

んが起きたら、行きましょね」と言ってください。

●あなたが上の子供たちも愛していて、構う時間も十分にあるということを、絶えず彼らに納得させてください。
カリフォルニア州プレントウッド
スーザン・S・フォックス

■良い点を探す

我が家では4人の娘がまだ幼いころに、家庭の夕べで人の良い点を探す活動を始めました。毎週だれかひとりが、両親を含めた家族一人一人を採り上げて、その人が前の週に行なった良い事柄や、その人の特に好きなおところについて何か言うのです。

この割り当ては、毎週違う人に順番に回ってきます。我が家で10年以上もこれ続けてわかったことは、良い点を探す活動を通して子供たちの中に自尊心が育ち、しかも毎週兄弟から自分の好きなおところを言ってもらえるので、けんかの回数も減ったということです。この活動を通じて、互いに批判したり、けんかをしたりするよりも、良い点を見つけ合うことを子供たちは学びました。

良い行ないを捜して家庭の夕べで紹介しているうちに、我が家には深い愛と一致の雰囲気が生まれてきました。
アリゾナ州ツーソン
ダイアナ・ブラウン

■公平さ

兄弟げんかが起きないようにするには、子供たちに愛情を注ぎ、心を配り、一緒にいる時間を作り、大切なものを与えるときに、親はいつも公平さを心掛ける必要があります。
ユタ州ソルトレークシティ
ロードリック・P・クレイマー

まとめ

1. 子供同士を比較せず、独自の才能に心を向ける。
2. 互いに助け合うように励まし、ほめて、兄弟間の愛情を育てる。
3. どの子供にも公平な愛と関心を向ける。
4. 子供一人一人の心に自尊心を育て、問題の発生を防ぐ。

日本伝道史

日本の地奉獻90周年記念

1901年9月1日、日本に上陸した最初の宣教師4人は、横浜の丘で日本の地を奉獻しました。
そこで今月は日本伝道史をいくつかご紹介します。

最初の宣教師のリーダーを務めた

ヒーバー・J・グラント長老のメッセージ

1901年(明治34年)8月

偉大にして かつ進歩国家である 日本へのごあいさつ

私はいと高き神の使徒すなわち神に仕える者として、ユタ州ソルトレークシティを本拠とする末日聖徒イエス・キリスト教会より派遣された者であり、同道の者と共に日本の皆様にごあいさつ申しあげ、私どもが携えてきた重要なメッセージをご検討いただけるよう望む次第であります。私どもは皆様方が信じておられる真理やこれまで受けてこられた啓蒙の光を奪おうとして参ったのではなく、より偉大なる光、より豊かな真理、そしてより進んだ知識を携えて参りました。そしてこれを無条件で差し上げたいと望んでおります。皆様方は、宇宙の創造主であり共通の御父であられる方の子であります。また英知として存在する人の霊は神がもうけられたものであり、その結果この地上のあらゆる男女はその人種、血族、種族、国語にかかわらず、すべてが兄弟姉妹なのであります。よって私どもは皆様方のこの世での、また次の世での福利を願い、兄弟愛の精神でお近づきになりたいと望んでおります。私どもに与えられている使命は、神のみ言葉とみこころを世に宣べ伝えるようにという、神の戒めによる義務に基づくものであります。私ども

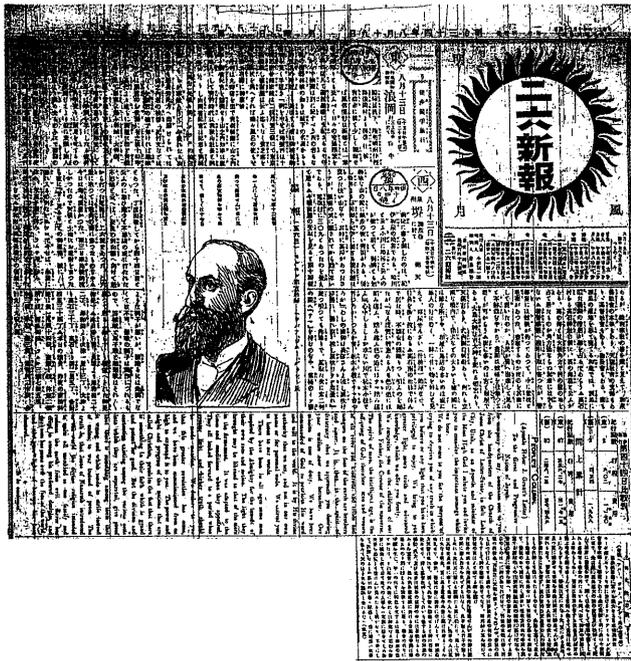
が行なうことのすべては、自らの名前や個人的な目的のために行なうのではなく、神の神聖な権能によって行なうのであります。皆様方が私どもの言葉に耳を傾けてくださるよう切に願ってやみません。

どの時代においても、自らの民族および国家のために神から靈感を受けた人が何人かおりました。そのような人々がもたらした知識の光は夜空に輝く星にたとえることができましょう。その光は、それが天に現われたその時代と状況に順応して参りました。しかしすべての星はより偉大なる光、より高い真理が現われる日を待ち望んでいたのです。このより偉大なる啓示はすでに与えられました。私どもはこれを皆様方にご説明申しあげるようにという天からの命を受けて参ったのであります。キリスト教国家と呼ばれる国々が権力や勢力を持ち、進歩発展を遂げていることは、キリスト教には何か偉大なものがあり、また善をもたらす力があるという事実を物語っております。しかし、数々の教派に分かれて互いに争っている事実を見ると、何か過ちが存在しており、それが統一の代わりに争い、平和の代わりに戦争をもたらしてしまうことを示しております。ナザレのイエスが全人類をひとつの家族として統一し、悪から贖うために神から与えられた宗教を教えられたことは事実であります。しかし弟子と称する者

たちの中にも過ちが入り込んできて、地上は暗黒に包まれ、天からの光は隠されてしまったのであります。

大いなる永遠の神はその無限なる慈悲によって、御子イエス・キリストが教えられた教義を地上に回復されました。すなわち、イエス・キリストが再びみ姿を現わされて主の教会をもう一度地上に組織され、初期の簡潔さをそのまま持ち、当時と同じ権能と力を備えた教えを宣べ伝えるために僕たちを選び、権能を授けられたのであります。これは時の初めから幾世代にもわたって多くの聖見者や賢人、詩人や予言者が述べてきた事柄がすべて成就する前触れと言える出来事であります。大いなる永遠の神は天からみ言葉をお授けになって、民と交わる道を開かれました。そして、あらゆる国々のすべての神の子らに、その階級、信条、地位、人種にかかわらず、悪の道を捨てて罪を悔い改め、心から神に近づくよう、また神から与えられた権能を持つ者によって罪の赦しのために水に沈められる浸礼を受けるよう命じておられます。さらに、このように神のみ言葉に従うすべての者には、神から権能を受けた者の按手によって聖霊が授けられるという約束が与えられております。こうすることによって新しく生まれ変わる、すべての従順な人々に天の王国の扉が開かれるのであります。

私どもは神の権能によって日本国民の皆様のために聖なる鍵によって天の王国の扉を開き、義なる太陽が放った光のもとに來れと申しあげます。そしてさらに、人のものではなく、人の力によるものでもなく、真実にして生ける神が威厳と栄光をもって統治される天からの貴重なる祝福を捧げるもので



「二六新報」
1901年8月19日付

聖にして永遠であられる神のみもとへと至る唯一の道を歩まれるようお願いしてやみません。そうすることにより、皆様方は平安と愛と喜びに満たされ、義人による大帝國を地上に設立するために、あらゆる国々および種族の偉大で心の清い人々と一体になる方法を知るようになることので

あります。皆様方の先祖が受けた善きもの、人を善へと導く教えは、この光に比べればほんのかすかな光にすぎないのであります。私どもは真昼の光の源からまっすぐに放つ真理を携えております。皆様方が光と真理を求め、神

よう。また来世においては、永遠の御父のみ前において正しく罪の贖いを受けた人々と共に住み、日の光榮の栄光を受けて永遠に統治するのであります。
キリストのために働く僕
ヒーバー・J・グラント

要である。

- (1)これから表明する言葉を聞いてくださるようにとの主への嘆願。
- (2)生命を守ってくださったこと、私たちが心に抱いている福音に対する証、主の予言者の目にふさわしいとされ、これまで福音を聞いたことのない民に生命と救いの教えを伝える使者として遣わされたという祝福への感謝。
- (3)罪の赦しの懇願。
- (4)真理を宣べ伝え、イスラエルの集合と地上に義を確立させるという主の目的を成就させるためにこの地を献納すること。
- (5)神権の力とイエスのみ名によってサタンはこの民の心を縛っている力を解くよう命じられ、この地における主のみ業を打ち負かそうとしていることに対して叱責を受けた。
- (6)かの大いなる憎むべき教会から日本の民を守り、またこの民に十分な知識を与えて、この地に先に広められようとした「人によるキリスト教」の浅薄さがわかるようにされた神への賛美の言葉。

(7)私たちは徳と誉れを持ち、献身的な者であって、日本の民のためになることをする目的で来たのであることを人々が知るように、また人々の心が宗教的な思いを抱くように向けられ、羊飼いの声をすぐに聞き分ける羊のようになって真理を聞いたならそれを知ることができるよう、その心に触れてくださいと主に嘆願した。

(8)恵まれて与えられている才能と主のみ業のためにそれを捧げることができることに対する感謝。

(9)この伝道部を開くに当たって必要な能力が与えられるようにという願い。

(10)教会および神権のための祈り。

(11)数年前突然病に冒されてほとんどの友人から見放されたとき、生命を救ってくださった主の慈悲へのグラント兄弟の個人的な感謝。この伝道に出るために主が自分の健康を回復してくださったことへの感謝。

(12)同僚への感謝。過去10年間伝道を続けてきたにもかかわらず、この地へ来て人々の霊を救うために喜んで奉仕しているケルチ兄弟の誠意に対して。

奉獻の模様を述べた最初の宣教師の

ひとりアルマ・O・テイラー長老の記録

きょうは断食日であったので朝食をとらずに、11時ごろ祈禱会を開くために森の中へ行った。宿を出て20分ほど歩いた所に人里離れた小さな森があった。そこは横浜の南にあるゆるやかな丘陵のひとつで南に面しており、山の手の外人居住地と海岸との中間にあった。

私たち4人は地面に輪になって座り、『感謝を神に捧げん』を歌って開会した。グラント兄弟が開会の祈りを捧げ、続いてケルチ兄弟が祈った。『いざ救いの日を楽しまん』を歌った後エンサイン兄弟が祈り、ひざまずいたままの姿勢で今度は私が祈って神への嘆願を続けた。私たちの祈りのおもな内容は、神への感謝と賛美、この地において私たちの肩にかかっている宣教師としての責任を果たす力を求めること、そしてまたグラント使徒の上に神のみたま

が十分に宿り、みこころにかなった奉獻の祈りを捧げることができるようになるというものであった。この森に行ったおもな目的は福音を宣べるためにこの地を主に献納することであったからである。4人が祈り終わると、私たちは『恐れず来たれ、聖徒』を歌った。それから再び輪になってひざまずき、グラント兄弟が献堂の祈りを捧げた。

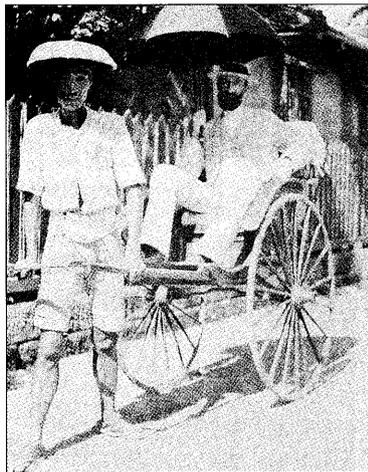
彼の舌は緩められ、みたまが豊かに宿った。みたまの力があまりにも強かったために、彼の口から言葉が出るたびに私たちの心は内に燃え、神のみ使いたちが近くに感じるほどだった。私は今までにこのような平安な気持ちを経験したり、このような力強い祈りを聞いたことはなかった。その言葉の一つ一つが私の骨にまでしみとおり、喜びの涙にむせるほどだった。次に記すのは私が覚えている祈りの概

コロラドの伝道から帰還したばかりであつたにもかかわらず、福音を宣べ伝えるために出掛けるという召しに何のためらいもなく喜んでこたえたエンサイン兄弟の心に対して。そしてその若さにもかかわらず主の寵愛を受けて英知と知識、そして真理への愛を得るためにこの地へ来て、真理を広めるといふ召しを喜んで受け入れ、それに身を投じている若い同僚である私に対して。彼は天父が続けて私を祝福されてさらに深い知識と力を与えられ、これを正しく使うよう、また古代のアルマのようにみたまに満ち、神のみ言葉を力強く守るよう神に求めた。

(13) 私たちが互いに抱いている愛と4人の中に存在する和に対する感謝の言葉。

(14) 3人のニーファイ人が訪れて、私たちの仕事を助けてくれるようにという願い。

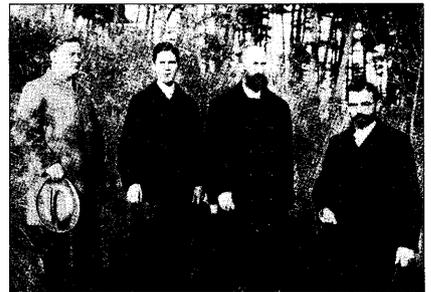
(15) リーハイが正しい人であつたこと、また主が命じられたことはそれが何であつても行なつたニーファイの大きな信仰について述べた。さらにまた、罪悪を行なつたためにニーファイ人から離れ、のろいを受けて兄弟であるレーマン人と同じような黒い皮膚になつた人々について述べ、主に背いてレーマン人に加わつたこれらニーファイ人



の血統を通してリーハイとニーファイの血がこの国の人々にも伝わつたために、その容貌と作法はアメリカンインディアンのそれとよく似ていたと感じたことを述べた。もしこれが事実であるならば、リーハイおよびニーファイが高潔な僕であつたことを忘れることなく、彼らの末日における子孫であるこの民に関して与えられた約束を実証して下さるよう主に求めた。日本はこれを受けるにふさわしい国だと感じたからである。

この奉献の祈りが捧げられた後、私たちは『時過ぎて』を歌つた。これに続いてグラント兄弟が、オリブ山上においてユダヤ人の集合と将来の故国と

左：宣教師のリーダーを務めた十二使徒のヒーバー・J・グラント長老。
下：日本の地を奉献した宣教師たち。
左からエンサイン長老、テイラー長老、グラント長老、ケルチ長老。



してパレスチナの地を献納した使徒オルソン・ハイドの捧げた祈りを讀んだ。それからグラント兄弟、ケルチ兄弟、エンサイン兄弟、私の順序で心に感じていることを表明し、互いに対する愛とこの地において主のみ業が成功するように持てる熱意のすべてを出しきつて努力する決意を述べ合つた。それから『高きに榮えて』を歌つた。散会する前にふたりずつに分かれて国の内陸部に行つてみるのが適當であるかどうかを考えた。全員がこの案には賛成の様子であつた。閉会の賛美歌は『God Moves in a Mysterious Way』(邦訳なし)。エンサイン兄弟が閉会の祈りを捧げた。

以下のふたつの記事はマレー・L・ニコルズ兄弟著“HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE L.D.S. CHURCH 1901-1924”「末日聖徒イエス・キリスト教会伝道史1901-1924」より著者の許可を得て要約したものです。

初めて日本語の「モルモン経」を出版

1909年(明治42年)

そのいきさつについて

アルマ・O・テイラー

1904年1月11日曜日の午後、東京四谷の霞丘町16番地にある伝道本部で、2回目の神権会が開かれました。ホラス・S・エンサイン伝道部長が管理し、伝道部の宣教師全員が出席しました。この集会では、もう1種類のちらしを準備する必要があるとい

うことが話し合われました。その後でエンサイン伝道部長がモルモン経の翻訳を始める時が来たと言いました。そして宣教師全員にまず余暇を使ってモルモン経の好きな部分を選んで翻訳し、それを大事に保存しておくように言いました。そして後日宣教師たちがそ

れぞれ翻訳した部分を持ち寄り、比較をし、改訳して全体の翻訳を完成すると話しました。

私はこの数カ月間、たびたび断食をして、主がモルモン経を翻訳する道を備えて、その時期を早めてくださるようとお祈りをしてきました。ですからエンサイン伝道部長の言葉を聞いたときには、涙がこぼれるほどうれしく思いました。そこで私はすぐに決心をして、できるだけ余暇を見つけて翻訳の仕事をするにしました。

1月13日水曜日、私は千葉市の伝道地に戻りましたが、いつも日曜日には東京にいることになっていたので、土曜日の夜には伝道本部に帰りました。

そして次の月曜日にはまた伝道地へ戻りました。そしてその夜ホテルの奥の6畳間で、ひとり畳の上の座布団にあぐらをかいて座り、座卓を前にしてモルモン経を初めて翻訳してみることにしました。最初のページから始めるのが正しいやり方であると思いましたが、まずタイトルページの最初のところから始めました。

1904年7月16日土曜日、午前中東京の伝道本部でエンサイン伝道部長管理の下に評議員会が開かれました。伝道部の宣教師全員が出席しました。そこで1月以来宣教師たちが行ってきたモルモン経の翻訳に関する報告が行なわれました。それによると、モルモン経翻訳の最初の計画は順調にいったことがわかりました。そこでエンサイン伝道部長は、翻訳のすべての責任を私に与え、翻訳が完了するまで、あるいはこの仕事から解任されるまでは、翻訳を私の第一の義務とするように指示しました。

そして翌日、私が床に就く直前に、エンサイン伝道部長は私の頭に手を置き、私を翻訳の仕事に任命しました。

そのころ私の伝道地はすでに千葉市から東京に移っていましたが、今度は伝道本部で働くことになりました。私は翻訳の仕事に精力的に始めました。日本語には弱い点もありましたが、仕事は順調に進みました。1月18日以来わずか数ページを翻訳したに過ぎませんでしたが、これが実質的な翻訳開始となりました。すでに翻訳を終えていた数ページも、もう一度やり直しました。やがてエンサイン伝道部長が解任されました。そしてその後を私が引き継ぐことになりましたので、伝道部長としての責任を果たさなければならなくなりました。そのため翻訳の仕事がたびたび中断されることになりました。あるときは15日、20日、30日、あるいはもっと長い間、私は翻訳から遠ざかることもありました。私が伝道部を引き継いだのは1905年7月4日でした。

私は漢字を使うことにはあまり精通していませんでしたので、最初の原稿をローマ字で書く方が時間の節約になると思いましたが。その後これを漢字に直すときには、慎重によく読み返しを

して、訂正が必要と思われる箇所を直しました。この書き替えには大変な時間がかかりました。伝道部長になってからは、私の使える時間のすべてを、翻訳に費やすことが必要となってきました。そこで1905年7月30日、フレッド・A・ケイン長老を翻訳の手伝いをする仕事に召しました。そして彼に私の翻訳したものをローマ字から漢字に直してもらうことにしました。私たちは彼が書き直したものをまた注意深く読み返して原文と照らし合わせました。ケイン長老が漢字で書かれた原稿を読み上げ、私がそれをローマ字の原稿と照らし合わせました。

1906年3月21日午前9時30分、翻訳の仕事を本格的に始めてからちょうど1年と9カ月目に、私は翻訳を終えました。一方ケイン長老は5月12日に原稿の書き替えを終えました。5月30日にはその校正が終わりました。

1906年3月21日から5月14日まで私は北海道に行って札幌の伝道地を訪問し、仙台の伝道地へも赴きました。しかしその間も絶えず翻訳の進行状況を思い出し、また将来のことをも計画していました。翻訳の仕事が私に任せられたのは、私が日本へ来てからまだ3年足らずのときでした。ですから最初の翻訳が欠点の多いものであったことは確かなことです。それからの1年と9カ月の間、私は翻訳のために必要な研究をすることによって、私の日本語も大きな進歩を遂げました。ですから翻訳の最初の部分は後半に比べると質が劣るものでした。私はすぐさま改訳に取り掛かる決意をして、1906年5月14日の夜から開始しました。

改訳の仕事は1907年12月6日までほとんど休みなく続けました。これに要した時間と労力を考えてみますと、改訳と言うよりはむしろまったく新しい翻訳と言った方が適切でした。原稿にぞっと目を通していても、最初の翻訳はほとんど残っていないことがわかります。改訳は次の要領で行ないました。

まず私が翻訳された文章を読み、日本語の見地からこれを研究しました。そして必要と思われる点を全部変更した後で、英語の原文と比較してみました

た。そして変更したために元の意味から外れてしまわなかったかどうかを調べました。このように比較することによって、さらに変更しなければならないこともしばしばありました。

その後で再び文章を読んで、それが滑らかな日本語であるかどうかを調べました。こうして私の仕事は終わり、次の人に回して、訂正されたとおりに書き写されていきました。この写し書きをするために書記として手伝ってくれたのはC兄弟とM氏(彼はこの仕事を手伝っている間にバプテスマを受けました)、そしてS氏でした。

すべての書き写しが終わったのは1908年1月27日でした。そして全体をケイン長老と私が入念に読み直しました。

このように清書を行なった理由は、最初の翻訳を何度も訂正し変更したために、原稿がほとんど読めない状態になってしまったからです。これを日本人の学者に読んで批評してもらうつもりでした。

この改訳をするに当たってもうひとつの非常に重要なことがありました。それはケイン長老の行なったことでした。1906年6月6日水曜日、彼は私の翻訳したものを入念に読み直して、これを英語の原文と比較する仕事に従事しました。このように読み直し比較することによって、多くの貴重な提案が出されました。私が無意識のうちに省略してしまった部分を発見することができました。このように良い結果を得られたことで、この過程が必要であったことが実証されました。ケイン長老は1908年1月31日にこの仕事を終えました。

そして1908年3月5日、甲府の長老たちを訪問している間に、私は彼の提案したことについてよく考えてみました。

翻訳は今や日本の学者による最後の批評を受ける準備が整いました。人々から受け入れられ、敬意をもって真剣に読んでもらえるような翻訳文を書くためには、私の日本語はあまりにも不完全でしたから、このような批評を受けることは絶対に必要でした。

1906年11月、私はこの仕事をH氏

に依頼しました。これまでの経験から言って、H氏が誠意と才能を持った人物であるとわかっていました。しかしそれから約1カ月後、H氏からこれを辞退する旨の郵便が送られてきました。そこでこの件は6カ月の間保留になってしまいました。しかし私は絶えずこの件で頭を悩ませていました。私がかつての学識があつて信頼できる知人の数は限られていたもので、非常に残念に思っていました。1907年6月5日、私は再びH氏に依頼しました。彼からはこの仕事はできない旨のはっきりとした断わりがきました。その後、H氏を通して神戸市のN氏を紹介されました。私は神戸へ行きました。その途中線路が崩壊して大変な目に遭いました。神戸でN氏に会いましたが、彼の放とうな顔つきと態度を見て仕事の契約はしませんでした。そして東京へ帰り、今度は仙台へ行きました。そこで新聞社の編集者S氏に会いました。彼は仙台で働く長老たちに好意的な人でした。S氏からは良い人だという印象を受けましたが、新聞という仕事の性質上、彼がモルモン経の批評にどれだけの時間と思考を費やすことができるかは疑問でした。そこではっきりとした契約をしないまま東京へ戻りました。N氏やS氏は私の要望にこたえ、彼らの仕事の見本としてニーファイ第一書第1章の翻訳の批評を提出してくれました。それらを見ると、驚いたことにふたりとも文体を変えてありました。彼らは変更した理由として、私の翻訳文に何とか力と威厳をもたせようと努力してみたがうまくいかなかったので、文体を変えたとのことでした。この変更は文体を最初から終わりまで全部変えなければならないという深刻な問題を投げ掛けてきました。この件に関してまた多くの協議、折り、調査、思考がなされましたが、最終的には文体を変更することになりました。

この決定によって過去3年間の私の仕事は反故となり、新たに翻訳をやり直さなければならないように思いましたが、幸いなことにそうでもありませんでした。

私は今度の文体に関しては特別な勉

強をしたわけではありませんでしたので、文体を直すためには、私の能力では不十分であると感じていました。そこで有能な日本人にこの仕事を託すことにしました。

この仕事をできる人を東京で探しました。私は大学の教授H氏の兄弟であるH氏を選びました。そして1907年9月2日に伝道本部で、H氏とこの仕事の契約をしました。

それから半年後、H氏に誠実な行動が認められなかったために、彼との契約を解消しました。私は彼が所有していた翻訳に関するすべての書籍や書類を受け取りました。契約を解消する際の証人としてケイン長老が同行しました。私はこの出来事でこのように感じました。この出来事で翻訳が多少なりとも遅れてしまったことは、大変悲しいことでした。しかし幸いだったのは、人間の不正な行為のために尊い翻訳が破壊されなかったということです。人が過失を犯しても、主はそのみ業を成し遂げることがおできになります。この聖なる書物の翻訳は神のみ業なのですから、神の祝福を受けて成功し、迅速に達成されることでしょう。

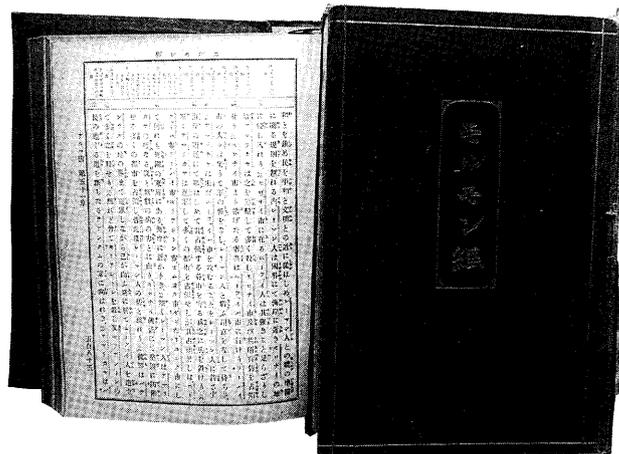
H氏は免職されるまで、ニーファイ第三書第3章の終わりまでの批評と書き替えを終えていました。また一度注意深く読み直しもしていました。H氏についてひとつだけ言っておかなければならないことがあります。それは私がかつての日本人の中で、H氏ほど一度に長い時間机に向かっている人を見たことがないということでした。だからこそH氏はこのような短期間に、大量の仕事をするこ

うことができたのです。

H氏が最後まで完成することができなくなってしまったので、私は代わりの人を探す必要が出てきました。できれば日本で最高と言われる人々の中から選びたいと思いました。

数年前賛美歌を準備するとき助けていただいたI氏を通して、大学の文学部長で有名な作家でもあるT氏への紹介状をいただきました。しかし彼には私の申し出を受けてはもらえませんでした。次にこれも著名な作家であるN氏に会いましたが、「この仕事をやる時間はない」とのことでした。次にN氏から、T大学を卒業してまだ間もないが、すでに数冊の著書も出しておられ、文学界ではなかなかの評判だというI氏を紹介されました。さっそく彼を訪ねましたら、「自分が適任者であると思われるならば、仕事を引き受けます」ということでした。彼の才能については私はまったく無知でした。そこで私はH氏が書き替えた原稿を2冊渡して、読んで必要と思う箇所を訂正してほしいと依頼しました。私はI氏について調査と検討を重ねた結果、彼に仕事をお願いすることにしました。そして1908年7月19日に彼と契約をしました。

日本語は文体によって大きく異なってきます。だれにも自分の個性や好き嫌いがあります。この度H氏の代わりにまた別の文体を持ったI氏がこの仕事を行なうことになりましたので、また最初からやり直す必要性が出てきました。このようにしなければ、最初の部分と後の部分が違う文体になる危険性があったからです。



最初の
モルモン経

I氏は1908年8月1日に仕事に取り掛かりました。ニューファイ第二書第3章の終わりまでの書き替えや訂正はすべて鉛筆で行なわれました。これをまた私が読み返さなければなりません。そしてその過程で数多くの疑問が生じてきました。その全部をI氏と話し合い、彼の答えに満足できなかった場合には、すべての疑問点が解消するまでほかの人々とも話し合いました。そして私が納得できない変更や提案を消しゴムで消して、私が承認した変更をインクで書き込み、それをH氏の使った原稿に書き写しました。幸いなことに、I氏は原稿にあまり数多くの変更を書き入れませんでしたので、再び清書する必要はありませんでした。

1909年1月13日、I氏はH氏が終えた所までの仕事を完成し、残りの部分を変える仕事を始めました。

6月10日12時30分、ちょうど昼食の知らせがあったとき、私は最後の参照聖句の翻訳を書き終えました。私はホッとして深くため息をつきました。それは大きな仕事を完成したときに自然に出てくるため息でした。そして私の胸は言葉には言い表わせない感謝と喜びに満ちました。しかし原稿を閉じてみるとまだあちらこちらに、小さな紙片が突き出ていました。それは問題がまだ解決されていない箇所や、提案がまだ承認されていない箇所、鉛筆の書き込みがまだ消えていない箇所などに印を入れておいた紙切れでした。そして7月24日、最後の紙切れがくず入れに投げ込まれ、原稿は完成しました。(それはくしくも私が家を出発してから、ちょうど8年目の日に当たっていました)

きすぎた。私たちは目黒へ帰る途中もう一度最初の家の前を通ってみた。そこで私は「この建物についてもう少し詳しく知りたい」と述べた。A氏はK氏から情報を得て、私に知らせてくれると言った。

次の月曜日、A氏はこの物件がKという不動産業者によって売りに出されているので、K氏が業者と会ってくれると報告してきた。私は時間を節約するためにA氏自身が業者に会えないものかと尋ねた。そこでA氏は業者に会い、この物件の売り値を聞いてきた。

それは手ごろな値段と思われた。私は以前銀行家であったN氏と知り合った。また私は、建物の現状と修復にかかる費用の概算についても専門家の意見を求めようと考えた。一方その間でも、家が売りに出ているというわさや手がかりがあれば、その全部を調査した。ある売り主を通してSという人と接触をした。私はS氏に好意を感じ、助けてくれるという彼の親切な申し出を受け入れた。翌日N氏の友達で、K氏が紹介してくれた建築会社の役員という人が、この同じS氏であることを知って私は驚き喜んだ。

その午後、元銀行家のN氏、建築会社役員のS氏、会社の建築家や技師たち、また陸軍技師として日本に来ていた教会員H兄弟などが建物の徹底的な調査を行なった。その結果は、3つの爆弾を受けたにもかかわらずそれほど大きな被害を受けていないことからわかるように、建物の骨格は非常に良い状態で、しっかりと建てられた家であるという一致した意見だった。

次の月曜日、私は次の3つの質問の答えを得ようとして出掛けて行った。

SCAP(連合国最高司令官)の規則上、私たちがこの物件を購入することが許可されるだろうか。

貿易庁を通してもっと有利な為替レートで購入することができないだろうか。

修理の費用も貿易庁から融資してもらえないだろうか。

GHQ(連合国最高司令官総司令部)、G-1のC大尉は「購入は可能であると思う」と言い、彼のオフィスを通し

戦後、日本伝道本部の土地 (現在の東京神殿がある場所) を取得したいきさつについて

エドワード・L・クリソルド

エドワード・L・クリソルド兄弟は終戦後米国軍人として来日し、戦争で消息が不明になった教会員たちに新聞広告を出して参集を呼び掛け、また伝道部長も務めた。

数 日間貸家または売家を求めて東京中を果てしなく車で走り回った結果、何も見付けることができなかった私は、休息と休養を求めて以前からの知人である目黒のH家を訪ねた。彼とは戦争終結後、私が東京にいたとき偶然町で会い、親しい知り合いになった。彼の家族は私を温かく迎え入れてくれ1時間ほど滞在した。私は話の中で、住まいを求めて東京中を探し回ったが無駄であったことを告げた。H氏は「家を見付けるのはむしろかしいが手伝いましょう」と言ってくれた。彼の娘婿のA氏も同様だった。

数日後、H氏がホテルへやって来

て、A氏が友人で皇族のビジネスアドバイザーをしているK氏と話をつけ、1948年3月20日土曜日に私と会う約束がとれたと言ってきた。そこで土曜日の午後、H氏とA氏と私の3人は車で皇族の公邸へ行き、優雅な大邸宅でK氏と会った。彼は住宅が必要であるという私の話を聞き、助けてくれることを約束した。彼はまず手始めに売りに出ているというふたつの焼けた建物の住所をくれた。私たちは邸宅を辞してから、早速近い方の麻布の住所へ行ってみた。そこは公園の向かい側のすばらしい環境の中にあった。かつての壮大な屋敷をしのばせる建物の焼け残った骨格が見えた。私はたちまちこの建物に強い興味を持ち、購入の可能性を感じたが、皆には何も言わなかった。それから私たちは市街に近いもうひとつの場所へ行ってみた。しかしそこは一面の焼け野原で、建物も大

てSCAPへ手紙を書くように提案してくれた。貿易庁の役人K氏は、貿易庁を通して購入することはできないが、修理の方は1ドルにつき約200円で行なうことができると説明してくれた。

東京にあるアメリカの銀行に預金をして、銀行から伝道部へ資金を貸してもらえないものかと考え、期待してマネージャーに会いに行った。彼は同情的だったが、円を貸すことはできないし、公定レート以外で行なわれる取り引きを認めることもできないので遺憾だと述べた。また外国人が土地家屋を買うことはできないだろうと述べ、GHQにもう一度相談するようにと言った。

銀行を出たところで伝道活動で知られているM博士に会った。彼は宣教師が土地家屋を買うことを許可するという指令書を見たことがあると言い、ESS課の人に話すようにと教えてくれた。そこで私は代理課長のR大佐に直接会いに行った。彼はしばらく頭をかいていたが、答えは翌日まで待つてくれるようにと言った。

翌日、R大佐を待っている間、私が訪問した理由を管理役人のH氏に説明した。彼はほかの宣教師たちのために同じ問題を扱ったことがあり、この件に関しては精通していた。宣教師が土地家屋を購入することを特に許可するという指令はないが、土地家屋の購入を規制する指令には宣教師が意図的に言及されていないから、規制の対象にはならないということであった。

事態はソルトレークから何らかの許可を得なければならない状況に達していた。私は幹部に送る電報の内容を頭の中で練っていた。そのとき通訳のK氏を伴ってA氏がやって来た。あの家を買いたいという人がほかにもいるので、持ち主の代理人である業者がこちらの進行状況を知りたいというのであった。このときまでは元銀行家のN氏は土地の所有者の名前を明かさうとはしなかった。私は業者と持ち主が少なくとも30日間はあの土地をほかの人には売らないという約束状に署名しない限り、話をこれ以上進めたくない」と説明した。A氏とK氏は業者に会いに帰り、私はソルトレークへ128

語の電報を打った。

ソルトレークの幹部からは「土地家屋の購入または賃貸を許可する。資金を電報で送った」という返事が届いた。しかし今度はA氏とK氏がやって来て、土地の持ち主は、「自分の会社の従業員のためのレクリエーション用クラブハウスとしてあの物件を会社に引き渡すことを考えている」と言った。そして翌週の月曜日にこれを決定するための会議が開かれる予定になっているから、火曜日になったらその答えがわかると述べた。

持ち主が売るかどうかを定める会議が計画されていた2日後、私はA氏に電話でソルトレークから購入の許可が下りたこと、そして間もなく資金が届くことを伝えた。彼はまだ会議の結果を知らされていなかった。私はもうそろそろ持ち主の名前を知らされてもいいころではないかと思った。そこで土地の住所を手に、心もとない日本語で出掛けて行った。2時間ほど国会議事堂と港区の建物の辺りを巡り歩いた末、麻布区役所に到着した。そこで持ち主はS氏であることを知った。

私はA氏とK氏を呼び、まだ会ったこともない業者のK氏にぜひとも会いたいと言った。彼はオフィスにいた。会話の中で私が持ち主の名前を述べるとK氏は驚いていた。そこで持ち主のS氏に電話をした。彼は翌朝会ってくれると約束をした。私はすぐにS氏に好意を抱き、この人となら取り引きができると思った。実際、この件に関して私は熱心に祈った末、どのような障害があったにしてもいつかは必ずこの土地家屋を手に入れることができると感じていた。私は値段が上がったのではないかと心配をしたが、S氏は今までどおりの価格で良いと言った。ただ彼は税金のことで困っていたので、もし私が税務署に実際より安い価格で買ったと報告することに同意してくれれば、取り引きはすぐにでも成立すると言った。しかしこれは論外な話だったので断わり、ほかの解決策を探した。

2日後、通訳のK氏、業者のS氏、持ち主のS氏とその書記、元銀行家のN氏、そして私で長い間話し合い

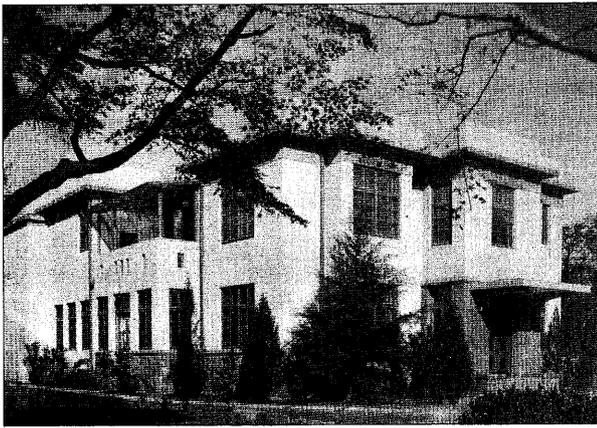
をした結果、ついに持ち主のS氏は土地家屋を無条件で教会へ譲渡し、教会は法律上許可が下りたときにそのときの相当額を円で支払うという同意書を渡すことに同意した。最後に私たちは権利書や譲渡の手続きなどについて話し合い、業者に教会の正式な法人名を渡した。

私は日本で教会を法人として登録することについて調べるために出掛けた。文部省でどんなことが必要かを聞いた。そして東京地方裁判所の日本橋支所へ行った。申請書に目を通してみると、弁護士が必要であることがわかった。翌日私はほかの土地のことで会ったことのあるYという弁護士を探し出した。彼は「事は比較的簡単だ」と言った。そのとき思いついたのは、教会が戦前日本で伝道していたときに、もうすでに登録してあったかもしれないということだった。Y氏はその日のうちにこれを調べてみたが、何の記録も見付からなかった。

オフィスに戻ると彼は「The Corporation of the President of the Church」の規約を作成していた。そして、土地家屋を所有するためには、教会の何らかの組織が日本ですでにその目的を果たしていなければならないと説明した。ユタ州に存在する「Corporation of the President」を登録するなどということはあり得ないというのであった。そこで私は日本伝道部を法人組織にすることにして、そのように規約を変更した。

4月19日、弁護士のY氏と共に私は伝道部を法人として登録することに関して日本政府の各役所を回った。この手続きには10日かかるのが通例であったが、私たちの申請にはすぐに取りかかってくれて、翌日までは登録証書ができ上がることだった。Y氏は大変驚いていた。次の日には土地家屋の名義変更の書類に署名しなければならなかったため、それまでにはどうしても法人登録を済ませておかなければならなかった。

4月20日、法人登録証書が発行された。Y氏と私はすぐに土地の持ち主であるS氏のオフィスへ行き、土地家屋を教会へ譲渡する書類に署名した。



戦後港区南麻布にあった伝道本部。現在はここに東京神殿がある。

促を重ねたので工事は急ピッチで進んだ。

この間、母屋の木材が組み立てられ、現場監督と技師が選ばれた。ある日彼らは一緒にやって来て、工事の開始をするために行なう日

本の儀式について話してくれた。これは「お払い」と呼ばれるもので、神道の神主によって執り行なわれるものであった。

このような儀式の目的と内容がよくわかってから、神主の「お払い」の代わりに、私が工事の上に神の祝福があるように祈りを捧げてよいのなら儀式をやっても差し支えないと答えた。彼らはよく考えてみると言った。

翌日、彼らがキリスト教の祈りでもよいと同意したので、この儀式の名称を「^く鉄入れ式」と変更した。

「鉄入れ式」は5月19日、午後3時に建物の南側で行なわれた。この土地家屋の持ち主であったS氏は私がスピーチと祈りを日本語で準備するのを手伝ってくれた。当日はS氏の司会で私がまず日本語で話し、次に英語で短いスピーチをした。教会員のK兄弟が教会を代表してあいさつをした。次にS氏、それから建築会社のK氏があいさつをした。そして私が次のような祈りを捧げて「鉄入れ式」は終わった。

「天にまします我らの父よ。本日、日本にできますあなたの教会の伝道本部の鉄入れ式に当たり、私ども少数の者がここに集まりました。あなたの導きによりここに選ばれた土地が与えられ、これを買うことが許されましたことを感謝いたします。たくさんの親切な友人が与えられ、彼らが私たちの仕事を助けてくださったことを感謝いたします。また親切で協力的なこの土地の持ち主に感謝いたします。父よ、本日ここに集まった人々の協力の精神に感謝いたします。父よ、あなたの祝福がこの仕事の進む間、共にありますよ

うにお祈りします。働く人々と監督する人にお恵みをください。またこの工事に関係する人々が心をひとつにして仕事を確実に、また上手に行なうことができますようにお祈りいたします。ここに働く人々が、けがと災いから守られますようにお祈りいたします。どうか各々が神のみ守りを感じることができますように、また働く者に喜びがあり、これによって生まれた友情がいつまでも続きますようにお祈りいたします。また私どもは時間と力をこの仕事の完成に捧げ、あなたの業がこの地に確立されんことをお祈りいたします。あなたの特別の恵みが私どもと共にありますように、イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。」

「鉄入れ式」には約60人が出席した。出席した会員は奈良富士哉兄弟姉妹、栗山兄弟、佐藤ミヨシ姉妹などであった。参列者の中にはこの土地建物を入手するために大きな貢献をしてくれたN氏やA氏も入っていた。そのほか出席したのは建築会社の役員や職人たちだった。式の後で全員にアイスクリームが出されたが、当時の日本人にとってこれは大変なごちそうであった。「鉄入れ式」は全員が上機嫌のうちに終わった。これによって建物の修復が始まり、日本伝道本部の建築について着手したのであった。

その後暑い夏の間建築現場で起こった出来事を詳細に書く忍耐力を私は持ち合わせていないし、また興味を持ってそれを読む読者もいないと思うが、私は現場に寝起きしていたので、工事の進行状況を絶えず把握していた。ホノルルからの床材や鉛管工事用の材料などのように、建築材料の入手が遅れたこともあった。床下材の敷き方で、建築方法の違いが現われることもあった。工事が進むにつれて、設計上の小さい変更が数多くなされた。しかし、いろいろあったにもかかわらず、みんな気持ちよく協力して働いた。主任設計士のW氏、現場監督のK氏、助手のS氏のようなすばらしい人々と共に働くことができたのは、願ってもなかなかかなえられるものではない。

完成した建物は、アメリカの建築の

最高標準とはとても比較にならないものであったが、しかし皆一生懸命やっ
たし、占領下の日本ではいろいろ困難
な事柄があったことを考えると、建築
会社の人々の働きは称賛に値するもの
だった。

10月16日、造園会社が仕事を始めた。
親方のSさんもまた一緒に働きやす
い人で、かつては荒れ地であった庭が
彼の指揮の下に楽園のようになってい
った。

工事の最後の仕事である門扉を備え
付け、庭木の植え付けと刈り込みが終
わったのは、意義深くも1948年11月25
日感謝祭の日だった。修復の進行状況
を見守り、今ここに伝道本部のすばら
しい居心地と美しさを楽しむことがで
きる私たちにとって、それはまことに
感謝を捧げる日であった。最初から最
後まで与えられた多くの祝福と導きに
対し、天父に心からの感謝を捧げる次
第である。

JMTC

7月に召された専任宣教師

第145期生13人



後列左から1-7, 前列左から8-13

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 露木由佳	東京東S/牛久W	沖縄伝道部
2. 菊池康恵	熊本D/熊本B	大阪伝道部
3. 梶原美紀	岡山S/岡山西W	東南伝道部
4. 芳賀恵	東京S/吉祥寺W	札幌伝道部
5. 神蔵操	神戸S/神戸W	東京北伝道部
6. 三條かおり	仙台S/山形W	神戸伝道部
7. 逸見香代	札幌S/札幌東W	名古屋伝道部
8. 岡澤靖	名古屋西S/御器所W	札幌伝道部
9. 岡本康	東京東S/鎌ヶ谷W	大阪伝道部
10. 工藤洋祐	札幌S/旭川第1W	東京北伝道部
11. 入江尚宏	大阪S/東大阪W	札幌伝道部
12. 宮里一祐	鹿児島D/谷山B	東京北伝道部
13. 工藤多美夫	東南S/渋谷W	札幌伝道部

S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

お知らせ

役員の内命

1991年6月25日から1991年7月18日ま
でに管理本部会員統計記録課に通知の
あった役員の内命(敬称略)

- 名古屋ステーク部名東南ワード部
新監督:日坂忍
(前任者:志村仁志)
- 岡山ステーク部鳥取支部
新支部長:小川弘二
(前任者:小谷護)
- 福岡ステーク部井尻ワード部
新監督:吉村信之
(前任者:池田玉喜)
- 熊本地方部佐世保支部
新支部長:原郁夫
(前任者:一丸俊雄)

編集室から

皆さんの原稿を 募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を
募集しています。改宗談や日々の生活
で得た証(仕事にかかわる証など)、本
誌を読まれての感想文などをお送りく
ださい。

▶これまでローカルページでは証の著
者の生年を記載しておりましたが、今
後は記載しないことになりました。た
だし編集作業の参考のため、投稿の際
には従来どおり連絡先(電話番号)、教
会での責任(役職名)に併せ、生年を記
入してお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直し
させていただくことがあります。また、
掲載されるまでには若干時間がかかる
場合もありますのであらかじめご了承
ください。

▶あて先:〒150 東京都渋谷区桜丘町
28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会
「聖徒の道」編集室

☎03(5489)9251